



# ACKU\_news 47

(2023 年度)



氷ノ山千本杉ヒュッテ竣工60周年記念山行  
(2022年11月6日、ヒュッテ前にて)

# 目次

第一章 巻頭言	会長 山田 健	1
第二章 理事会関係		
(1) 新山岳部副部長の紹介	水谷 淳	2
(2) 山岳会会費収入の状況(会計担当からのお願い)	岩井正隆	3
第三章 紀行・随想・活動報告		
(海外編)		
(1) ネパールトレッキング	酒井利直	4
(2) 第3回及び第4回グレートヒマラヤトラバース	吉井 修	1 7
(3) 続・夫婦の海外トレッキング	山形 裕士	2 5
(4) チベット関係書籍の紹介	大竹口誠治	3 1
(国内編)		
(1) 山岳会同世代の集まり	田中信行	3 3
(2) ブナ立て尾根～野口五郎岳～竹村新道	山本恵昭	3 6
(3) 早月尾根～剣岳	山本恵昭	3 8
(4) 北アルプス表銀座縦走(2023年9月)	小林 功	4 0
(5) ご当地アルプスを「やり込む」	川端 充	4 3
(6) 近隣旅行記～秩父・飯能～	近藤昂一郎	4 5
(7) 幌尻岳登山報告書(2023.9.2～5)	大竹口誠治	4 7
(8) 荒川三山・赤石岳登山報告書(2023.9.30～10.5)	大竹口誠治	4 9
第四章 例会山行報告		
(1) 第251回 氷ノ山整備山行	藤川佳祐	5 1
(2) 第253回 ACKU例会山行報告書(雷鳥沢キャンプベース)	山田健/大竹口誠治	5 2

(4) 第254回 山岳会・山岳部 合同忘年会 長谷川浩 56

注：第249回 氷ノ山スキー山行、第250回 井上山荘ベースのスキー及び

第252回 氷ノ山山行は中止になりました

第五章 山岳部活動報告(2023年度) 山岳部 57

第六章 事務局報告(総会・会員近況報告・理事会・会計・予算)

(1) 総会・会員近況報告・理事会 事務局 71

(2) 会計・予算 事務局 76

編集後記 大竹口誠治 78

## 第一章 巻頭言

### 巻頭言

山岳会会長 山田健

山岳部の現役時代において、四季折々に様々な山行を会員の皆様も経験されていると思います。私が現役であった1970年代のころは部の活動は「登山学校方式」と呼ばれ、大体次のような年間サイクルで部員たちは技術的にも精神的にも登山を学び且つ楽しんでいたと思います。

- 5月連休に新人歓迎山行と上級生による残雪期のバリエーションルート
- 6月に主に新人のための雪上訓練のための合宿
- 7月後半夏季休暇に入ると同時に剣や北鎌尾根での夏合宿
- 8月には夏合宿から連続して数パーティーに分かれて東北や北海道の沢登り
- 9月10月ごろに岩登りや縦走などの秋山
- 11月後半に氷上登降技術習得のためのアイゼン合宿
- 年末から正月にかけて山スキーと雪山バリエーションルートの冬合宿
- 3月に1年の総仕上げとして長期に雪山に入る春合宿

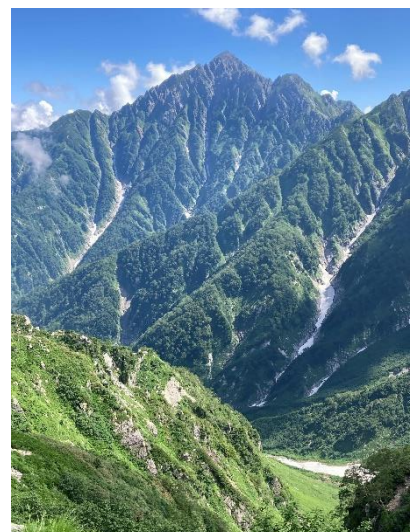
これを4年間、人によってはそれ以上のサイクルを経験してようやく「登山学校」を卒業するという感覚でした。今の現役諸君のサイクルとは少し異なっているようですが。

これらの山行で私にとって特に思い出深いのは、夏合宿でしょうか。新人のときは、入部以来それまで上級生からちやほやされていた状況が一変し、鍛えなおされるという雰囲気の中、今まで見たこともなかった岩壁や雪渓を登って行くという強烈すぎる経験。上級生になると憧れの日本屈指の難ルートに挑戦するといった高揚感。毎朝夜明けごろから雪渓を登って岩稜や岩壁に取りつき、配られた昼飯のレーションはすぐになくなっていつも空腹、午後にはへとへとになって雪渓を転びながらベースキャンプに帰還。それが10日間くらい続く。梅雨明け直後なので天候が安定し、連日真っ青な空が広がっていた……。他では経験できないようなそんな夏合宿がたまらなく懐かしく思い出されるのは私だけでしょうか。

「そんな夏合宿」の雰囲気だけでも再び味わいたい、そう思って本年度7月の山岳会例会に4日間の雷鳥沢合宿を初めて企画・実施しました。ベースキャンプを雷鳥沢に置いて、期間中参加者各自の都合で入山下山日を自由にして、ルートも参加者それぞれの体力に合わせて自分でルートを決めて歩くようにして、できるだけ広い世代が参加しやすいように配慮しました。食料は主食のコメ類、麺類だけを各自に持参してもらい、主菜は世話役がまとめて用意したのも参加しやすいようにとの配慮です。雷鳥沢キャンプ場は高原バス終点の室堂から30分も歩けば着くし、そこをベースに立山三山、別山、剣御前、竜王岳、浄土山、奥大日岳、少し足を延ばせば、剣、五色ヶ原などがルートとして取れます。別に登山をしなくても避暑に上がってきて終日山を眺めるといった参加も大いに有りです。下山も高原バスのほか大日岳経由で称名滝に下ることもできます。また、テント泊がどうかという方には、近くに山小屋が3軒あり温泉にも入れるし、キャンプ場のトイレも水洗で新しくなりました。北陸新幹線ができて関東からのアプローチも格段に良くなりました。このようなことからまことに雷鳥沢というところは最適なところだと思います。

本年度の雷鳥沢例会には壺阪、大竹口、山田（4日間）、坂本淳（2日間）、山本恵（3日間）と5会員が参加しました、日中は各自体力に合わせて好きなように行動し、三々五々テントに帰還後は皆でわいわいと持ち寄った嗜好品を囲みながら、昔話に花をさかせてまことに楽しい時間を過ごしました。下界が猛暑に苦しんでいるときに、実に快適に過ごしておりました。80歳代の壺阪会員は2日目に私と共に、剣が最も尖って見える（右写真）という奥大日岳を往復し、3日目には単独で別山乗越（剣御前小屋）を往復されました。別山乗越はなんと現役の1年生のときから60数年ぶりだったそうです。当時は重荷に耐えて雷鳥沢を喘ぎ上り、やっとの思いで着いた乗越で剣が見えたときに失神してしまったと、昔のことを懐かしそうに語られていました。

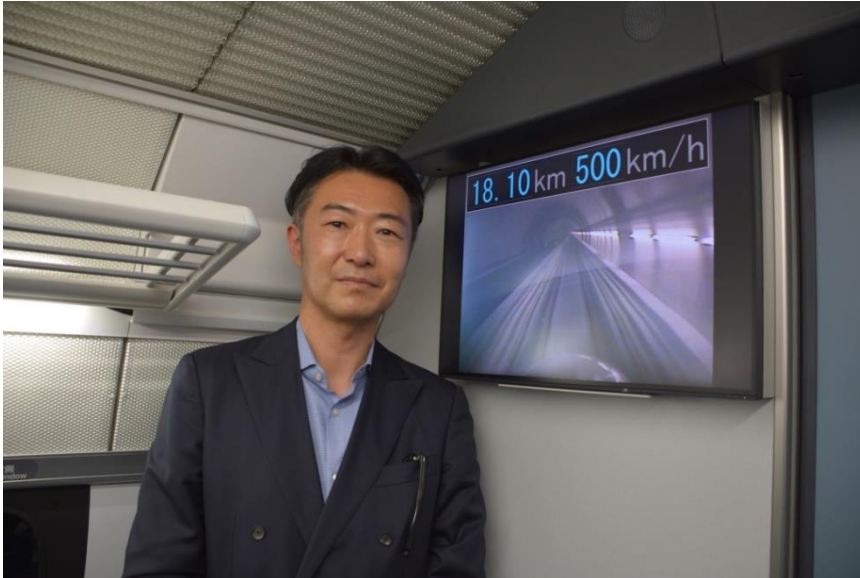
今回の参加者は5名と少なかったですが、壺阪会員は「こんないい企画なのにもっと参加者がいてもいいのに」と言われていました。2024年度もこの企画を続けますので、是非会員の皆様にはご参加いただきたいと思います。



## 第二章 理事会関係

### 新山岳部副部長の紹介

水谷 淳・山岳部副部長（名誉会員）



（リニアモーターカー試乗時の写真）

この度、副部長に就任しました水谷です。私は海事科学研究科・海洋政策科学部に 2013 年に赴任し、交通経済学を担当しております。交通に関する諸問題を経済学の視点から考察する研究分野で、特に交通事業者間の競争構造について研究を行っております。登山は、中学のワンダーフォーゲル部入部をきっかけに始めました。初めての夏合宿で登った燕岳から見たご来光の感動は今でも鮮明に覚えています。現在は、年に 1 回、六甲山や金剛山に登る程度です。神戸大学山岳会・山岳部の活動がより充実するようお手伝いさせて頂く所存です。どうぞよろしくお願いいたします

#### 学歴

1993 年 立教大学経済学部 卒業

1999 年 関西大学大学院商学研究科前期博士課程 修了

2004 年 大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程 修了 博士（経済学）

#### 職歴

1993～1997 年 ヤマト運輸株式会社

2004～2013 年 大阪商業大学経済学部専任講師・准教授

2008～2009 年 カナダ・ブリティッシュコロンビア大学交通研究所客員研究員

2013 年～現在 神戸大学大学院海事科学研究科准教授

#### 受賞歴

2004 年 日本交通学会賞（論文の部）

2011 年 日本海運経済学会賞（論文の部）

2019 年 日本海運経済学会国際交流賞

2021 年 住田航空奨励賞

## 山岳会会費収入の状況（会計担当からのお願い）

岩井正隆

Z世代の学生は他にいくらでも楽しい遊びがあるため、登山のようなきつくて辛いサークルには入らない傾向があり、全国の大学山岳部の存続が危ぶまれています。早大や京大などかつての山岳名門大学のほとんどは部員数が5名以下となり、大多数の大学の山岳部は廃部・休部（甲南、関大など）となっています。数年後には、大学山岳部は絶滅するともいわれているなか、幸なことに神戸大学山岳部は現在9名の部員に恵まれて活発に活動しています。

ところが、現役活動をサポートし、夢をかなえる海外遠征をともに果す山岳会の予算が激減し、山岳会の存続が危ぶまれる状況に陥っています。

言うまでもなく、山岳会の活動予算は会員皆様の会費のおかげで成り立っております。図1の過去7年間の会費収入状況に示すように、2016年度380,000円、2017年度406,422円、2018年度672,598円（会費督促活動の効果、終身会員からの協力金の納入により増加）、2019年度467,228円（会費督促活動の実施）、2020年度319,365円、2021年度292,032円、2022年度230,981円と90名程度の会員（終身会員・名誉会員を除く）に納入していただける450,000円（点線：年度予算書の計画額）を大きく下回っております。

また、図2の2001年から2023年までの個人会費納入状況（終身会員・名誉会員を除く）に示すように、会員番号282～346くらいまでの65歳以上の会員は、安定して定額会費（点線：115,000円）に近い会費を納入していただいておりますが、それ以降の会員番号に相当する20歳代から60歳代前半の会員は会費が未納の方と全納の方が著しく分かれています。この状況が続くと、山岳会会員の高齢化が進んで急激に会費収入が減少するものと危惧されます。まず来年度からの1年度分でも良いので、未納の会員におかれましては、会費を納入していただくようお願いいたします。この危機の壁を登攀してともに学生時代を謳歌した仲間が集える山岳会が、いつまでも存続できるように、ご協力お願いいたします。

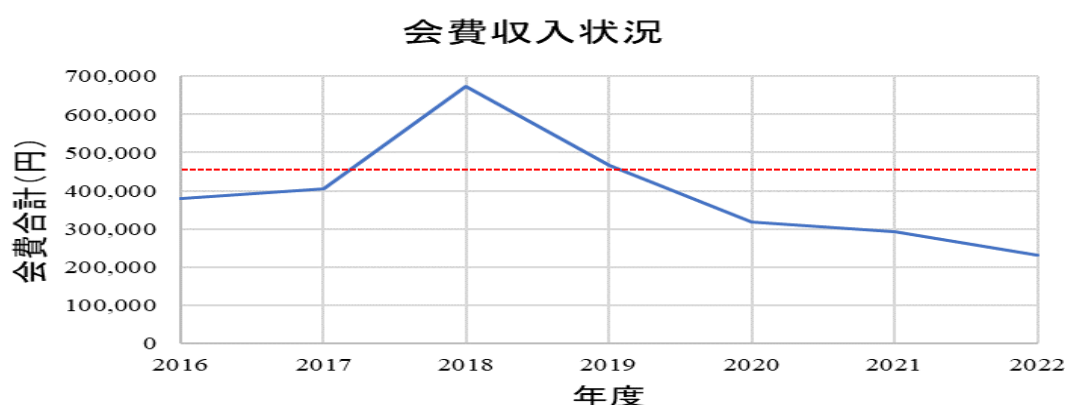


図1 過去7年間の会費収入状況

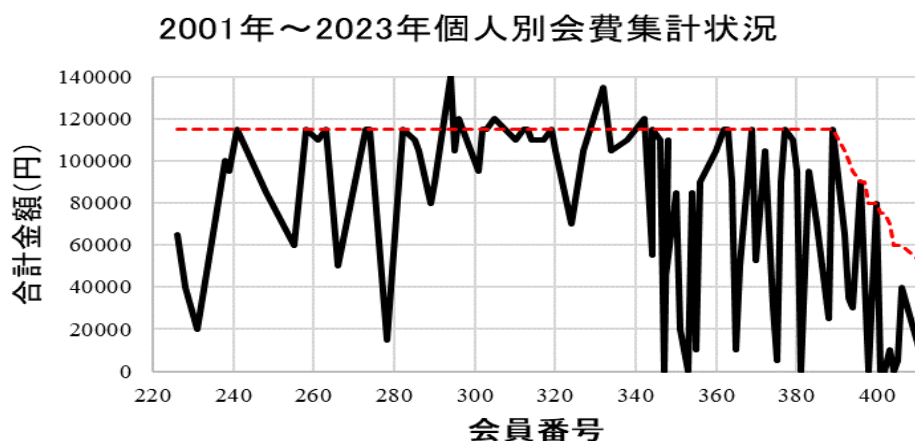


図2 2001年からの2023年までの個人会費納入状況（終身会員・名誉会員を除く）

## 第三章 紀行・随想・活動報告（海外編）

Help Nepal Association Japan 第27回ネパールの旅  
2023年秋 ムスタンからチトワンそして学校訪問

酒井 利直

### 1. 今回の旅行の目的

今回の旅行の大きな目的は今まで我々が足を踏み入れたことがなかったムスタン北部にトレッキングを行うことにあった。ムスタンは古代より、チベットとネパール・インドを結ぶ交易の要衝として栄えてきたところで、乾燥した土地に多くの仏教遺跡が残っている。それらの仏教遺跡を訪ねるのも旅の目的であった。トレッキングの後はインド国境に近いチトワンまで飛行機で移動し、チトワン国立公園でジャングルに棲息する野生動物を観察することにした。

乾燥したチベット高原につながるネパールとインドにつながる温暖で湿潤なネパールを短期間に経験し、ネパールの多様な地形や文化・風俗に触れるのも旅の目的の一つであった。

学校訪問については、震災復興のため5教室を建造しているカブレ郡のカプル小学校（カトマンズから東へ40km）で新教室の贈答式を行った。

今回の計画は15日間という限られた期間内でネパールの色々な様相を体験して貰いたいという企画者の意図を目一杯盛り込んだものとなった。

### 2. メンバー

酒井 利直 73歳（企画・マネジメント） 石原 敏雄 77歳 緒方 順子 71歳  
玉置 亮 20歳

### 3. 行動概要

・2023年10月30日（月）

ネパール航空434便 成田発11時 カトマンズ・トリブバン空港着16時25分便にてネパールに渡航。

トリブバン空港到着後 Plan Holidays の迎車でタメル地区のホテル Ramada Encore に向かい投宿。ここは新しく開業したホテルで設備は整っていた。

夜はインド料理店 Third Eye <https://www.thirdeye.com.np/>で歓迎ディナー

10月31日（火）晴

トリブバン空港からポカラ空港へ飛行機で移動（11時50分発13時着）。ポカラ空港がお祭り騒ぎのため、搭乗機はしばらく Holding（空中待機）していた。山好きの我々はマナスル山塊やアンナプルナ山塊の景色を楽しむことができた。

空港にはシティガイドの Bimal さんが出迎え。手配の車で Hotel Mount Kailash Resort <https://www.mountkailashresort.com/> に向かう。遅い昼食の後、車で International Mountain Museum（国際山岳博物館）<https://www.internationalmountainmuseum.org/>に

国際山岳博物館にて



向かった。

ポカラ空港は国際空港化に伴い、新しい場所に移転し、旧空港はジョムソン便の発着にのみ使用されている。新旧空港間の移動時間は車で約20分だ。ポカラ空港は国際空港になったが、現在のところ政治的な問題からまだ国際便の発着は行われていないようだ。

ポカラの景勝地サランコット山には2022年にロープウェイが開通し簡単に登ることができるよ

うになっている。<https://annapurnacablecar.com.np/>

8千メートル峰のアンナプルナやダウラギリを簡単に見ることができるポカラの観光地としての人気が高まることは間違いない。

### 11月1日(水) 晴

朝8時に今回のガイド Ramsin Tamang がバスでカトマンズから駆けつけて、ホテルで合流した。Ramsin Tamang は、酒井が10年前にアンナプルナ内院ルートを新津さんとトレッキングした時のガイド Pratap Tamang のお父さんだ。Ramsin は、予定では昨日合流する予定だったが、縁戚に不幸があったため、トレッキング当日の合流となった。ポカラ空港(旧)から飛行機にてジョムソン空港へ(ポカラ発10時30分ジョムソン着11時10分)。ジョムソン Jomsom (標高2,720m) で昼食を取り、カグベニ Kagbeni (標高2,800m)



上流からジョムソン方面を眺める

に向けてトレッキング開始。16時カグベニ到着ホテルニルギリに投宿。個室ごとにトイレとシャワーが付いていた。今回のムスタントレッキングでは全ロッジがトイレ・シャワー付き個室に泊まることのできた。ムスタンのロッジは、トレッカーだけではなく、自動車による旅行者、バイクツーリスト、マウンテンバ

イクによるサイクリストなど色々な旅行者が利用するので、設備が整っている。



## 11月2日(木) 晴

7時に朝食を食べ、チェレ Chele (標高 3,100m) に向けて出発。カグベニからはニルギリ峰 (7,061m) が間近に見える。この日は広大なカリガンダキ川 Kali Gandaki Nadi の左岸沿いの道を歩く。Nadi はネパール語で河、特に大河を指す言葉で、ここは大河というに相応しいほど川幅が広い。チェレ到着 14時45分

## 11月3日(金) 晴



朝日を浴びるニルギリ峰

この日は行程が長いので、6時に朝食を食べて出発。くねくね続く自動車道をショートカットして登る道は傾斜がきつい。

9時20分サマール Samar (標高 3,620m) 到着。サマールから少し登った後、急斜面を降り、ジュワ谷 Jhuwa Khola にかかる吊橋を渡った。その少し上でルートは山沿いを進む左のルートとチュンシ峠

Chungsi La (3,810m) を越えて、シャンボチェ溪谷 Syangboche Khola に下り、そこからまたシャンボチェに登る右ルートに分かれる。我々は右ルートを取った。なぜならシャンボチェ溪谷の左俣にチュンシ洞窟という有名な仏教史跡があるからだ。この洞窟はパドマサンバヴァ Padmasambhava が瞑想したことで知られている。8世紀後半ごろ活躍したパドマサンバヴァは、チベットやブータンではグル・リンポチェとして知られているチベット密教の開祖であり、ニンマ派の創始者でもある。ムスタンの多くの寺院にはパドマサンバヴァの像が祀られている。



シャンボチェ溪谷への降り

シャンボチェ溪谷への降り道は急傾斜だった。

この洞窟まで足を伸ばしたかったが、ロートル組は疲れていてその元気が残っておらず、若い玉置さんとガイドだけが洞窟を訪ねた。

ロートル組は真っすぐシャンボチェ（標高 3,800m）に向かい、途中で洞窟組と合流し、午後 3 時にシャンボチェの Chungshi Guest House & Restaurant に到着した。当初の計画では、ここから 1 時間半ほど先のゲリン Geling（標高 3,570m）に向かう予定だったが、変更してここに泊まることにした。ゲリンの山小屋からは一人 7 5 0 ルピーのキャンセル料を請求されガイドが翌日払いに行くことになった。

11月4日（土）晴



トラバース道でマウンテンバイクが追い抜く

午前 7 時シャンボチェを出発。昼食予定地のガミ Ghami（標高 3,510m）には、トラバース道と緩やかな下りが続く。途中でマウンテンバイク組に追い抜かれる。

長い下りをたどり、12時50分ガミのロッジ Lo-Ghami

Guest House に到着し昼食。緒方さんが疲労していて、徒歩で今日の宿泊地ダクマル Dhakmar（標高 3,820m）まで行くのは困難と判断し、バイクで送って貰うことにした。ガイドが宿の人と交渉し、2千ルピー（約2千円）で送って貰うことができた（支払はチップ込みで20ドルとした）。

ダクマルの目の前には赤い大きな岩壁が広がり、その右側には白い岩壁が広がっている。

ガイドは「赤い岩壁はパドマサンバヴァが悪魔と戦って、悪魔を弓矢で射止めた時、悪魔が流した血で染まったもので、白い岩壁は同じく悪魔が流した脳漿で染まったものだ」と説明してくれた。



ダクマルの赤い壁

男性 3 人はムスタン最長のマニ・ウォール（経文が彫られた壁）を観ながらダクマルへの道を登った。ダクマル到着 17 時。

緒方さんは食欲乏しく、少し嘔吐した。手や顔のむくみはなく、高山病の可能性は少ないが、ガイド

よりダイヤモンドを貰い半錠飲んだ。もし翌日症状が悪化するようであれば、下山を考えるが、この日はまず休養して貰うことにした。

#### 11月5日（日）晴

緒方さんの様子は変わらず。体調は悪化していないが、食欲不振。ガイドが血中酸素測定器で血中酸素濃度を測ると 95% 程度だった。ほぼ正常値で高山病の可能性は低いと判断したが、ガイドがこの日の目的地ローマンタンに親しい医者がいるというので、その医

師の診断を受けた上で最終判断を下すことにした。

緒方さんの体力が低下しているので、ローマンタンまでジープをチャーターすることにし、ガイドにチャーターを依頼した。ガイドが複数の知人に照会したところ、ローマンタンにジープセンターがあり、そこから 10 時



ローマンタン遠望

着予定でジープを手配して貰い、全員ジープに乗ることにした。チャーター代は8千ルピー（規定料金）だった。全員ジープに乗ると、荷物を担いでくれるポーターが不要になったので、1日早くポーターを解雇することにした（なおポーター料金は Nonrefundable で前払いしている）。ポーターには一人40ドルのボーナスを支払った。

10時ダクマルをジープで出発。13時ローマンタンのロッジ Lotus Holiday Inn 到着。緒方さん、ポーター、玉置さん、私で医師を訪問。医師はドクターオフィスの向かい側の土産物屋で緒方さんを診察した（患者がいるドクターオフィスを一時的に抜け出してくれた模様）。脈拍、血中酸素濃度の測定、眼球の検査、問診（嘔吐回数など）を経て、医師は Cold Sick と判断した。発熱等風邪の症状は出ていないが、体の冷えと疲労から吐き気を催し、食欲不振に陥っているという見立てのようで、吐き気止めの薬、胃酸中和の薬を呉れた。治療費は無料ということだが、ガイドがお気持ち代を置いた方が良いというので1千ルピーを謝礼として渡した。

ロッジに戻ってから1階の喫茶店でカプチーノを飲んだ。緒方さんの件が良い方向に向かいほったしたこともあり、ゆっくりと美味しいコーヒーを楽しんだ。

11月6日（月）晴

丘の上の城跡



ローマンタン見学の日である。ガイドの奨めで午前中は男性3人で街の北にある小高い丘に登ることにした。標高は4,030m。丘の上には14世紀中頃ムスタン王国を築いたアメパル王 Ame Pal が築いた城跡があった。

午後は体調が回復してきた緒方さんも参加し、4人でまずムスタンきっての高級リゾートホテル Royal Mustang Resort を訪問し、アップルジュースなどを頂いた。

<https://royalmustangresort.com/>

このホテルは旧ムスタン王家が所有する物件という。重厚な調度品と落ち着いた雰囲気が素晴らしいホテルだ。

その後4つの寺院が並ぶローマンタンの中心部を見学した（入場料は10ドル）。

・11月7日（火）晴

ジープでローマタンからツァーラン Tsarang(Charang 標高 3,575m)を經由してガミに向かいそこで宿泊した。ツァーランは河口慧海が約 10 カ月滞在した村で、ゴンパの中に河口慧海の像が祀られていた。

・ 11月8日 (水) 晴



馬に乗って聖蹟へ

ムスタン最後の日。この日はカグベニ經由で聖地ムクチナート Muktinath (標高 3,760m) を見学してジョムソンに向かった。

カグベニからムクチナートに向かう道は舗装されていて快適だ。ムクチナート到着は 13 時。昼食を食べてから、聖蹟参詣に出かけた。聖蹟

に向かう長い石段を避けて、馬に乗る人も多い。緒方さんも馬に乗った (650 ルピー)。



ムクチナートのヒンドゥ寺院

ここはヒンドゥ教・仏教共通の聖蹟で、ヒンドゥ教の寺院とチベット仏教のゴンパ(寺院)が同居している。ヴィシュヌ神の祠堂を三方から囲むように 108 の真鍮の牛の口から流れ落ちる泉水はこの名物の一つだ。

仏堂内の岩の間から天然ガスが噴き出し、燃えている場所がありこ

こも名物になっている。

17 時前にジョムソンに到着。トレッキング最後の夜は恒例により、ガイドを交えて打ち上げを行った。

・11月9日(木) 晴

ジョムソンからポカラ経由でチトワンまで飛行機で移動する日。飛行機は7時30分フライトの予定なので6時半頃には空港に入った。既に多くの乗客が来ていたが、ポカラから飛行機が飛んでこない。ポカラが曇っていて飛行機が飛び立てなかったということがあとで分かってきた。

ポカラからチトワンには10時30分のフライトを予約していたので、やきもきしていたが、9時過ぎ頃から飛行機が飛んできて、我々は2番目の飛行機に乗ることができ、9時30分過ぎにはジョムソンを離陸し、10時前に旧ポカラ空港に着陸した。

旅行会社から航空会社に状況を説明し、チトワン便の離陸を少し待って貰いなんとか搭乗することができた。

チトワンのバラトプル空港 Bharatpur Airport 着は11時50分過ぎ。ホテル Soaltee Westend Resort の迎えの車でホテルに向かった。空港からホテルまでは18km30分の快適なドライブだった。

午後4時にホテルの車で地元民タルー族の村を訪問した。訪問した集落は観光客向けに自宅を見学させている。

夜はタルー族の女性による踊りが披露された。

緒方さんがすっかり元気になってきた。

・11月10日(金) 晴



午前中はカヌーにてラプティ Rapti 川を下りながら、野生動物を観察する。ホテルはラプティ川の北側にあり、川の南側がチトワン国立公園になっている。サイなどの野生動物は公園内に棲息している。幸運なことに岸边近くで草を食んでいるサイを見る事ができた。

サイは1日200kgの草を食べるとのことだ。その後クロコダイルの飼育地を見学した。

昼からはジープに乗って国立公園内で野生動物を観察した。猿、鹿、カワセミ、サイなどを見ることができた。

・ 11月11日 (土) 晴

朝食前にネイチャーガイドと一緒に野鳥観察の散歩。11 時前にホテルの車でバラトプル空港へ送って貰い、カトマンズに戻った。

この日はヒンドゥ教のお祭り (ティファール) 日で、バラルさんの近所の人たちのパーティに参加させて貰いご馳走を頂いた。

・ 11月12日 (日) 晴



パタンのクマリ

カトマンズ市内観光の日。9時に観光ガイドのユーブラッシュ・カフレ Youvraj Kafle 氏がホテルに来た。車でまずスワヤンブナート Swayamhunath 寺院を参詣。ここは猿が多くモンキーテンプルとも呼ばれている。



次にパタンに向かった。パタンではまずクマリの館を訪ねクマリから直に祝福を受けた。クマリとしてはカトマンズのクマリが有名だが、カトマンズのクマリは遠くから見るだけで写真を撮ることもできない。これに比べてパタンのクマリはスマートフォンで写真を撮ることが認められている。

その後パタン博物館 <http://www.patanmuseum.gov.np/>で仏像彫刻等を見学した。

幾つか寺院を巡りながら最後にたどり着いたのが、クンベシュワル寺院 Kumbheshwor Temple だ。ここの境内の井戸にはランタンの聖地ゴサインクンドの泉の水が湧水となって湧き出ているという伝説が伝えられている。残念なことに現在の井戸は湧水していたが。

その後カトマンズの大きなスーパーで有名なボーダナート寺院を参詣しこの日の観光は終わった。

夜はバラルさん一家、トレッキングガイドのラムシンさん、シティガイドのユーブラッシュさんと一緒に日本食レストラン・桃太郎で夕食を楽しんだ。日本人旅行者が減っている中で桃太郎が店を拡大して繁盛しているように見えたので、ガイドさん達に聞いてみるとネパール人や外国人旅行者で日本食を食べる人が増えているということだった。

・11月13日（月）晴



カプール小学校の新教室

カプール・マハンカル小学校の校舎（5教室）贈呈式を行う日である。4輪駆動車とバラルさんの車2台で、9時過ぎに学校に向かった。同行者はバラルさん夫妻・娘のアンジェラさん、バラルさんの奥さんジャヤさんの姉妹とシティガイドのユーブラッシュさんと我々4人だ。ユーブラ

ッシュさんはバラルさんの友人である。

11時30分頃学校に到着すると、学校の先生方や30名近い児童がすでに集まっていた。贈呈式は元校長の司会で行われ、自治体の人などの挨拶、教室の鍵を渡すセレモニーなどを経て、最後は緒方さんが寄贈したピアノや縦笛の演奏で無事終了した。

その後学校の近くの建設中のゴンパを見学し村のレストランでランチをご馳走になり、その夜の宿泊地パナウティの民泊に向かった。

パナウティの民泊は昨年泊まった家に泊めてもらうことができ、料理を手伝うなど楽しいひと時を過ごした。

・11月14日（火）晴

ネパール最後の日。飛行機の出発時間は23時25分なので、パナウティに近いナモブッダ Namo Buddha <https://namobuddha.org/namobuddha.html> を訪問した。ここは飢えたトラにわが身を餌として捧げた王子の捨身餌虎伝説で有名な仏教の聖地である。尾根の上に築かれた寺院の建物の周りからは、ランタンリルンやドルチェラクパがよく見えた。同行の





ガイドはエベレストが見えると言っていたが私は遠くに見える山がそれかどうか判断できなかった。

標高 1,500m眺望絶好のこの地からヒマラヤの峰々を眺めていると、古人がここを仏教の聖地とした理由がよくわかる。

次にバクタプルに向かい、タマディ Taumadhi 広場のレストランで昼食を食べた。

バクタプル観光の後、ネパール最後のディナーはバラルさんの自宅でご馳走になり、最後はトリブバン空港まで送って貰った。20時30分に空港に着くと大勢の旅行者で混みあった。中にはティファール祭りで帰国していたネパール人で出稼ぎ先に戻る人も多くいたと思われる。帰国便は23時25分出発予定だったが、出発が遅れ成田に到着したのは予定時間から1時間ほど遅い午前10時となった。

色々なことがあったが無事に旅を終えることができた。

献身的にサポートしてくれたガイドのラムシンさんやバラルさんご夫妻に感謝の意を捧げたい。

#### 4. 費用について

渡航費用 ネパール航空直行便（成田空港～トリブバン空港）を利用。エコノミークラス往復約15万円、ビジネスクラス往復約25万円（料金は予約ルートや予約時期により若干異なる）

現地費用 約3千ドル（総ての宿泊料・食事代・国内交通費・ガイド/ポーター代・入山料を含む）

包括料金に含まれないものはガイド・ポーターに対するチップ、アルコール飲料および冷たい飲料料金などである。

今回のトレッキングは従来のトレッキングより、かなり現地費用が高くなっているが、その大きな理由は、ムスタン地区への入山料600ドルがかかったことと各地の移動を飛行機で行ったことが大きい。

#### 5. ムスタン地方の旅行について

ムスタン地方の旅行者の流れは、大きく分けてローマタン往復を目指す人と仏教・ヒンドゥ教の聖地であるムクチナート往復を目指す人に大別することができる。もちろんローマタンを訪問する人の多くは我々のようにムクチナートに足を伸ばす人が多いと思われる。インドからの巡礼者が多いムクチナートには手前のカクベニから舗装道路が伸びていて別世界の感があった。またムクチナートには新しいホテルが幾つか建設中で交通イン

フラの整備（ポカラ新空港の発展やポカラ・ジョムソン間の道路整備など）が進むとさらに多くの人を訪れるものと思われる。

ローマンタンを中心とするアップームスタンについては、自動車道の整備が進み、自動車・オートバイによる旅行者が増えている。また少数ではあるが、マウンテンバイクによる自転車旅行を行っている人にも出会った。私見ではあるが、今後自動車による旅行が増え、トレッキングをする人は漸減するのではないかと考えている。

## 6. 学校支援活動について

今回5教室の新築支援を行い、11月13日に譲渡式を行ったカプール小学校については、中々立地の良い場所で今後とも村の教育施設として長く活用される可能性が高いと判断した。小学校は比較的広い尾根上の広場に立地し、周辺はネパール料理に広く使われるマスタードオイルの元になるマスタードの黄色い花が咲き誇っていた。また学校の近くには大きなゴンパ（仏教寺院）が建設中であり、完成後には数十名の修行僧が修行に励む場所になる可能性がある。案内してくれた僧侶の話では、ここを近くの仏教の聖地ナモブツダに次ぐような修行の場にしたいということであった。

5教室については基礎工事・内装は終了し、外壁工事を残すのみとなっていて、11月末か12月の始めには授業に使えるようになると判断した。

## 7. 反省点と今後の課題

今回の一番の反省点は、トレッキング4日目から緒方さんの体調が悪くなり、予定を若干変更したことである。緒方さんの体調が悪くなった時はまず高山病を心配したが、むくみがないことなどから高山病の可能性は少ないと判断し、一晩様子を見て翌日ローマンタンの医師の診断を受けることにした。翌朝ガイドがパルスオキシメーターで血中酸素濃度を測定したところ、ほぼ正常値と判断した（参考までに測定した他のメンバーより緒方さんの血中酸素濃度の方が高かった）。そこで予定通りローマンタンまでジープで進み、同地の医師の診断と投薬を受け、緒方さんの体調は回復に向かった。

緒方さんの体調悪化の後の対応については、妥当な判断を下したと考えている。

問題は今回のトレッキングの1日の歩行時間が長かったことにあったと考えている。具体的には3日目のチェレ（標高3,100m）からサマール（標高3,620m）に登り、一旦谷に下り、また標高3,810mのチュンシ峠に登りまた谷を降ってそしてシャンボチェ（標高3,800m）へ登り返す行程では相当体力を消耗した。後知恵であるが、ここは高度順化のためにもサマールで一泊するなど無理のない行動計画を組むべきだったと反省している。

日程の上でもう一つ考慮すべき点はジョムソンからチトワンへの移動だった。ジョムソンからポカラへの飛行機便の出発予定時刻は7時30分で、ポカラからチトワンへの飛行機便の予定出発時刻は10時30分だった。フライトが予定どおりであれば、問題はないが、この日ポカラ上空は雲が多く有視界飛行が困難でポカラ便が遅れ、ぎりぎりチトワン便に乗るといった綱渡り状態になった。ジョムソンからポカラへのフライトが遅延またはキャンセルされる可能性があることを考えるとポカラで一泊するなどリザーブ日を設ける方

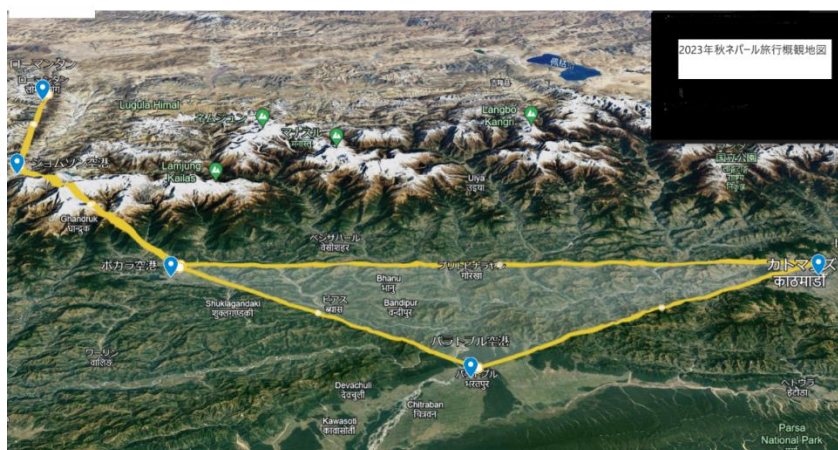
が良かったと考えている。

以上のようにスケジュールがタイトになった最大の原因は、限られた旅行日数の中で目一杯な行動計画を立てたことにあった。次回以降は参加者の年齢・体力を考慮し、もう少し余裕のある計画を立てたいと考えている。

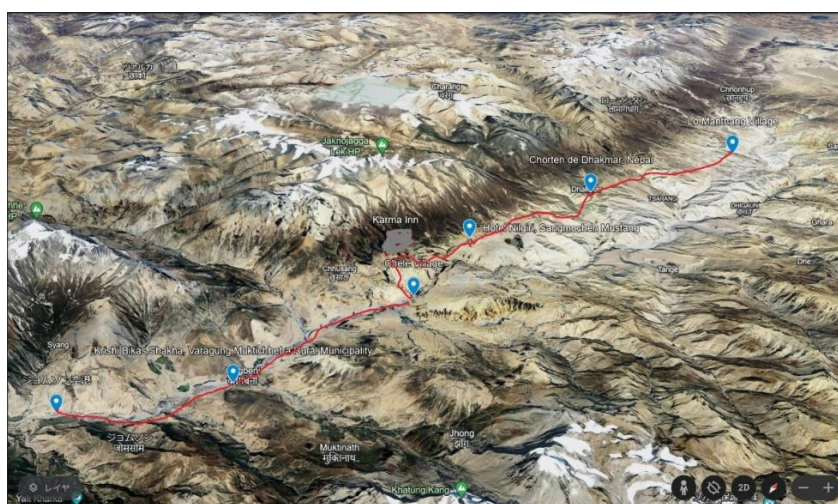
## 8. まとめ

年齢・経験等に大きなばらつきのあるメンバー構成で、楽しい旅が続けられるかどうか多少の懸念を抱いていたが、メンバーの皆様の協力で無事旅の目的を達成することができた。メンバーの皆様やHNA事務局の皆様、そしてPlan Holidays travel & toursのバルル社長ご一家の皆様、ガイドやポーターの方々に感謝の意を捧げて結びとします。以上

### 【旅程全体の参考地図】



### 【トレッキングルート概要図】



- i ポカラ新空港は中国の援助で建設された。これに対しインドは国際便の発着に反対しているため、国際便の発着は行われていないようだ。
- ii チャーター代については「体調不良」ということで旅行保険に支払を請求する予定。

日本山岳会 120 周年記念事業  
第 3 回・第 4 回グレート・ヒマラヤ・トラバース

吉井 修

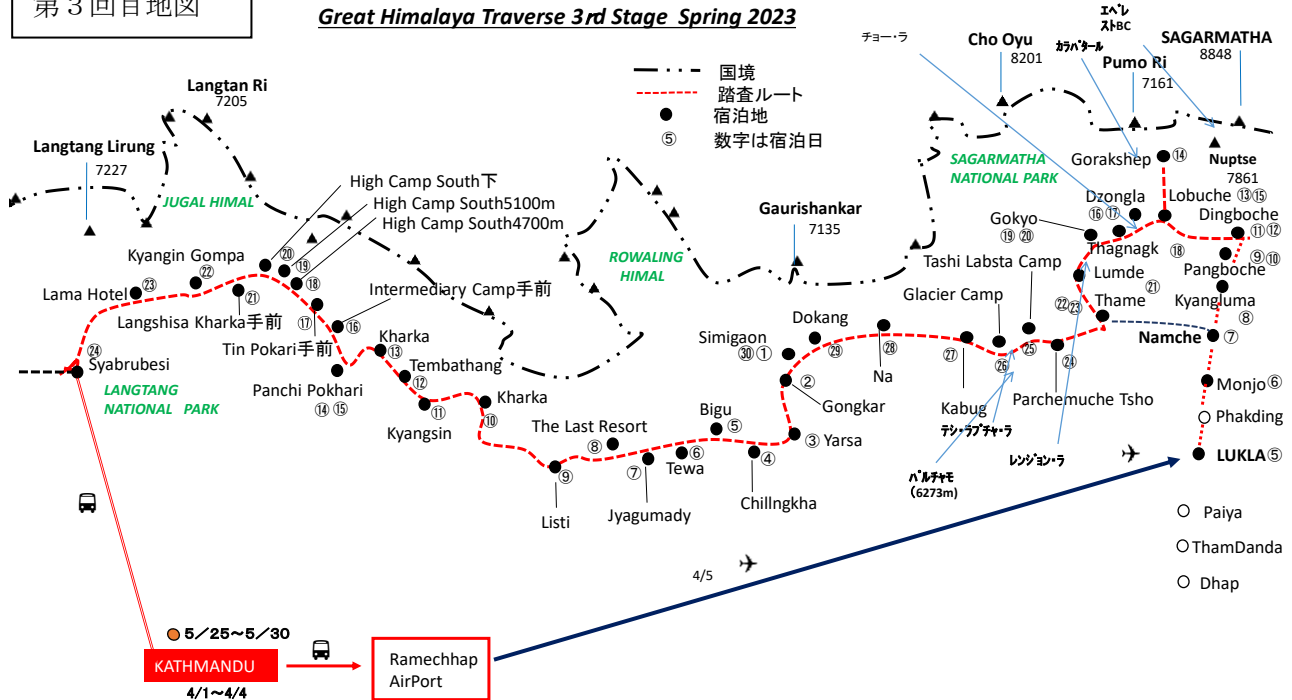
2023年は第3回GHT（春4/1～5/31）で、エベレスト山群、ロールワリン山群、ジュガール山群、ランタン山群、第4回GHT（秋10/7～11/25）で、ガネッシュ山群、マナスル山群、アンナプルナ山群を歩いてきた。歩行は第3回はルクラ→シヤブルベシ49日間、第4回はシヤブルベシ→ムクチナート34日間。

第3回は隊長・重廣恒夫（75歳）、吉井修（62歳）、飯田邦幸（68歳）の3隊員にエベレスト街道だけの短縮コースに中村三佳（59歳）、味岡四郎（62歳）の2隊員参加。

第4回は隊長・重廣恒夫（76歳）、吉井修（62歳）、飯田邦幸（69歳）、藤井正彦（76歳）の4隊員の参加であった。

第3回では、チョー・ラ（5420m）、レンジョ・ラ（5360m）、テシ・ラプチャ・ラ（5755m）、ティルマンのCOL（5308m）の4つの峠、第4回ではパンサン・パス（3830m）、ラルキヤ・ラ（5135m）、トロン・ラ（5415m）の3つの峠を越えた。ここではこの7つの峠越えに絞り、これらを歩いての所感を述べてみたい。

第 3 回目地図



(1) チョー・ラ（5420m）

4/6ルクラを出発、高度順応に配慮しつつ、モンジョ、ナムチェ・バザール、キャンジマ、パンボチェ、ロブチェとエベレスト街道を北上し、4/14にエベレストBC（5364m）到達、4/15カラパタール（5550m）を往復し、4/16ロブチェからゾンラ（4830m）に入った。

第3回GHTの最初の峠越え・チョー・ラは、ロブチェから西のゴーキョに直接抜けるのに通過する。通常のトレッキングツアーはナムチェ・バザールを起点に私達の歩んだ道を北上しエベレストBC、カラパタールを目指すものと、その1本西の道を北上しゴーキョを目指すものとに大別され（逆二等辺三角形の等辺のようになっている）、それを往復していることが多く、カラパタールとゴーキョの間（底辺）を直接峠越え（チョー・ラ越え）するものは少ない。エベレスト街道一番の難所を言ってよい。

私達（この時は吉井、飯田、中村の3隊員になっていた）はゾンラで1日休養の後、4/18 6:50出発、チョー・ラ越えにかかった。標高差は600m、最初、ゆったり登り、途中からガラガラの岩場の急な登りになる。雪が出てきて10人ほどのドイツ人パーティを抜いた。9:40 氷河の縁に出て、チェンスパイクを装着。氷河は硬く歩き易かった。最後、振り返ると谷の一番奥に第2回で近くを通ったバルンツェ（7152m）が遠望され、11:00 チョー・ラの上に立った。トレッカーが減る区間とはいえ、さすがエベレスト街道、コルの上にはたくさんの方がいた。上半身裸になってランチする西欧人もおり、びっくり。下りは長い道のり、タンナ（4700m）に下り着いたのは14:15。この日の行程は7時間25分。



チョー・ラの登り。

振り返って、中央奥がバルンツェ（7152m）、左の尖峰はロブチェ・イースト（6119m）

## （2）レンジョ・ラ（5360m）

ゴーキョ（4790m）からターメ（3820m）に抜けるのに通過する第3回GHT 2つ目の峠越え。ゴーキョからの標高差は570m。4/21 6:45ゴーキョを出発、チョ・オユー（8188m）が青い空に素晴らしい。チョー・ラ越えとは異なり、谷をつめるのではなく、支尾根を登っていく感じ。振り返るとゴーキョの湖とその向こう雲を吐くエベレストが実に美しい。コルに近づくにつれ、周囲には岩の尖峰が現れ、道も岩の道となるが、アイゼンを履くこともなく、11:10 レンジョ・ラに立った。コルからの下りは急で、一気に下りて行く。下り切ったからの平坦な道は長く、14:35 ルムデ（4368m）着。この日の行程は7時間50分。

到着後16:30頃からは雪となり、翌4/22朝はまばゆい白銀の世界、ターメ（3820m）に下った。

## （3）テシ・ラブチャ・ラ（5755m）

ターメで1日休養。中村さんは去り、逆にターメに直行してきたポーターと合流した。この先は吉井、飯田の2隊員だけ。が、ガイド1名、カトマンズポーター4名、ローカルポーター13名の総勢20人の陣容であった。テシ・ラブチャ・ラ越えはターメから標高にして2000m、また登らねばならない。ターメからはエベレスト街道の喧騒を離れ、ルートの難易度もグンと上がる。

4/24 曇天の中960m登って、パルチャムチェ・ツォ（4780m）の避難小屋の前にテント泊。4/25も900m近く登って、テシ・ラブチャ・キャンプ（5665m）まで行くはずであったが、雪が降り、ルートファン

ディングに苦慮。ポーターの一人に高度障害が出ているという。12:10 テントを張ることになったが、実際には5200m付近であったと思われる。

翌4/26は晴れた。が、高度障害のポーターは立ち上がるのさえも難しい状況で、ナイケともう一人のポーターの3人で、応分の荷を残したまま、ターメに戻ることになった。（ナイケともう一人のポーターは驚異的な体力で、この戻りの3日の差を埋めて、4/30に私達に追いつき、事なきを得た）。

さて、4/26はアイゼン・ハーネス装着して8:10出発。2ピッチ目に平らな場所があり、そこが本来のキャンプサイトと思われた。ここからは高度の影響もあり、厳しい登りが続いた。FIX2本、アッセンダーを使って登るなどして、12時やっと急登を終えた。左手の方にトラバースして、12:45～コルに向かって、ゆっくりゆっくり緩やかに登って行った。13:45テシ・ラブチャ・ラ着。コルのすぐ先にはクレバスがあり、それを慎重に回り込んで下降を開始。壮大な景色の中を一目散に下りて行き、15時、氷河への下り口に着く。60mのFIXを張って下り、氷河の上のテントに入った。私達がテントに入ったのは16:30であったが、荷下ろしに時間がかかり、全員が揃ったのは18時であった。体は冷えて、夕食はご飯とみそ汁のみであった。翌4/27は氷河の中を約10時間の下り、4/28さらに6時間20分下って、ナ村に着いた。テシ・ラブチャ・ラ越えは相当のアルバイトであった。

このテシ・ラブチャ・ラの左横がパルチャモ峰（6273m）であった。凍りついた美しい峰であった。私の卒業の時（1983年の春）、神大山岳部の同期や一年上の先輩達が登りに行かれた峰。コルから頂上までは標高差500m、コル上にテントを張れば、登れると思った。あの春、同期の福島君が行く気があるなら、先輩にかけ合ってやると言ってくれた。が、山岳部も辞めているのだし、若くして父を半年前に亡くし、次いで祖母も亡くなったばかりで、そんなことできる訳ないと諦めた。が、この齢になって、パルチャモのすぐ横のコルを乗っ越すことができた。ちょうど40年の歳月が経っている。これがパルチャモかと感慨深いものがあった。



レンジョ・ラの登り

振り返って、ゴーキョ湖と左奥、雲を吐いてるのがエベレスト（8848m）



テシ・ラブチャ・ラにて、飯田隊員と吉井。背後パルチャモ峰

#### (4) ティルマンのコル (5308m)

テシ・ラブチャ・ラを越えて、5/2には 車道が通るコンガル (1440m) に出た。風邪の為、短縮ルートで2隊員と共に一旦カトマンズに戻られた重廣隊長が戻って来られた。この後、GHTルートは西へ村々を縫い、5/8にはチベット国境のコダリに向かう道路が通るラストリゾート (1170m) に着いた。ここからまた徐々に高度を上げ、ティルマンのコルに向かった。1949年にティルマンがランタン谷側から到達したコルである。ランタン谷に抜けるにこのコルを越えねばならない。第3回GHT最後の難関である。

5/14 パンチポカリ (4070m) 到着。パンチポカリとは5つの池の意で、本当に5つの池がある美しい所である。1日休養の後、5/16 コルに向かって出発した。コル通過は3日半後のはずであった。5/16 インターメディアリー・キャンプ (4273m) の少し下、5/17 ティンポカリ (4255m) の手前、そして5/18はルートをはずれていることに気づき4700m付近にテントを張った。5/19は9:30一旦、正しいルートに戻ったが、その直後から視界が悪くなった。ガイド・ポーターが先行していくが、隊長の持たれるガーミン・インリーチで見るにコルとの直線距離が感覚比僅かしか縮まらない。この日、コルを越えることはできず、8時間30分行動して、5100m付近にテント設営。テント設営の少し前に英国隊が私達のトレースの後を追いついてきて一緒にテントを設営した。さて、翌5/20はいよいよコル越えのはずだった。コルまで標高差も200mほどしかない。しかも快晴である。8:30出発、岩壁を左に順調に登っていた。ところが11時、コルを思えた所には壁が立ち塞がり、ポーター達がたむろしている。標高は5400mですでにティルマンのコルより高い。ルートが違うという。早い段階で正しいルートより西側の氷河に入り込んでいたのだ。

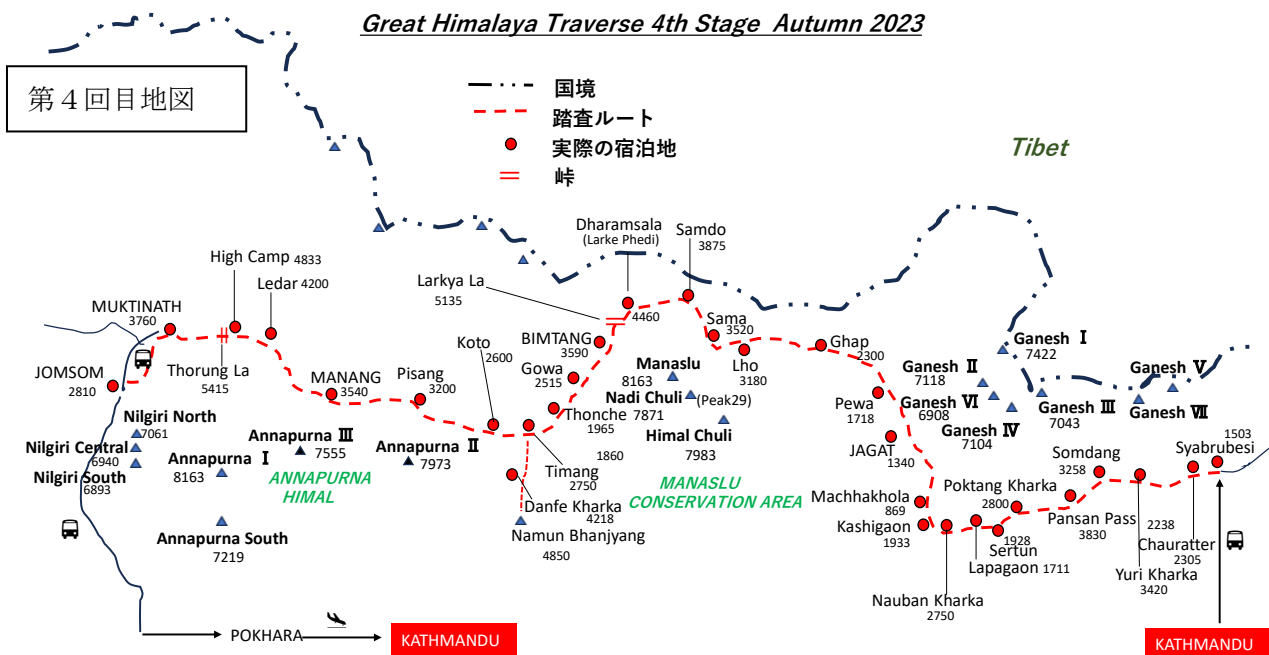
ガイドのラムカジが反対側から一度、コルを越えたことがあるので、先導を任せていたが、視界が悪かった上に雪の状態により景観が様変わりすることが間違いの原因。インリーチでおかしいのではという思いもあったが、先頭との通信手段もなく。私達も英国隊も大変なショックであった。

11:20から退却、結局、5/19に正しいルートに一旦出た近辺まで戻って、登り返す形になった。この日は正しいルート上の4700m付近にテントを張った。5/21は早朝6:40出発、今日は何としてもコルを越えて、ランタン谷まで下りてしまわねばならぬ。既にポーター達の食糧が尽きていたのである。彼らは

先行し、隊員3人だけ後ろを追う形になった。ティルマンのコルは正面下部に懸垂氷河を有し、なかなかの景観。先行した英国隊は懸垂氷河の右岸側を登ったが、時間と共に落石の恐れがあるので、私達の隊はルートを取った。懸垂氷河の上に出ると、傾斜は緩まり、13:05ティルマンのコルに立った。だが、この時にはガスが出ていて、コル上では展望を得ることができなかった。あとはランタン谷へ向かって一目散の下りである。しかし、最初の1時間ほどは雲も切れて、雪崩落ちるかのように見える右手の青い氷河等にとれて楽しく歩いたが、谷が北から北東向きにカーブしてからが長かった。途中から夜間行軍、しかも谷の下りとなり、ランシタ・カルカの少し手前4150m付近のテン場に飯田、吉井が着いたのは翌午前1時、重廣隊長は午前4時になった。この日は私で18時間20分の行動、文字通り第3回GHT中の最難関となった。



ティルマンのコルの登り。





(5) パンサン・パス (3830m)

第4回GHTは、第3回GHTの終着地＝ランタン谷を下りてきた町・シャブルベシから始まった。最初  
に歩くのはガネッシュ山群。GHTのルートは山群の南を西へ進む。

10/12にシャブルベシを出発し、パンサンパスには4日目10/15に到着。峠上にテント泊した。夕刻は東  
方にランタンリルン (7227m)、翌朝はこれから進んでいく西の方向にバウダ (6672m)、ヒマルチュ  
リ (7893m)、ピーク29 (7871m)、マナスル (8163m) が遠望できた。とりわけ、東方から見るヒ  
マルチュリの雄姿は素晴らしかった。マナスルは1956年日本山岳会、ヒマルチュリは1960年慶応義塾  
大学、バウダは1970年に同じく慶応義塾大学、ピーク29は1970年に大阪大学、ランタンリルンは1978  
年に大阪市立大学といずれも日本人によって初登頂されている。



パンサン・パスにて、左から、バウダ、ヒマルチュリ、ピーク29、マナスル。

(6) ラルキャ・ラ (5135m)

マナスル街道 (マナスルサーキットとも呼ばれる) を私達は東から西へ時計と反対周りに歩く。ガネ  
ッシュ山群を11日間で歩き、10/22 マナスル街道の出発点のマチャコーラ (869m) に到着。1日休養の  
後、10/24～マナスル街道を歩き始めた。マナスル街道は滝あり、吊り橋あり、美しい麦畑ありで、マ  
ナスルが見えるまでも決して飽きることにない素晴らしいトレッキングロードである。10/28マナスル  
登山のベースとなるサマ (3520m) に到着し、翌10/29はマナスルBCの手前まで往復した。

ラルキャ・ラはサマからマナスル街道を北西へ、2日半の所にある。マナスル街道からアンナプルナ  
街道に抜けるにはこの峠を越えねばならない。歩行19日目の10/30サマを出発して半日でサムド (3875m)  
泊、10/31も半日進んでラルキャ・フェディヘディ (4460m) 泊。途中、マナスル北峰とその左にマナ  
スルがサマとはまた違う白い姿で見えた。ラルキャ・フェディでは、最初4人用のロッジに入ったが、  
あまりに狭いので、テントに寝ることを選択した。翌朝、まだ真っ暗な4:15 ヘッドランプをつけて出  
発。緩やかな登りが続き、続々と西欧人の隊が登ってくる。日本人の姿は見ないが200人近いトレッカ  
ーがいたのではなかろうか。6:50 2回目の休憩の時、日が昇った。その後も氷河の横を緩やかに登って  
いく。7:35 石積み避難小屋のようなティーショップがあって、ミルクティーを飲んだ。こんな所で  
営業しているのだから、すごい。10:15チェーンスパイクを履き、10:40 ラルキャ・ラ着。ラルキャ・  
ラはタルチョがはためき、たくさんの人が記念撮影をしていた。緩やかに下りて行くと、向こうにネム  
ジュン (7140m) やヒムルン (7126m) が素晴らしい。下り始めて最初の休憩でチェーンスパイクを外

し、その後はどんどん下って、ビムタン（3590m）に着いたのは16:25であった。この日の行程は12時間10分。



10/30 サマ〜サムド間、マナスル（8163m）を背に4隊員。

#### （7） トロン・ラ（5415m）

ラルキャ・ラを越えて、マナスル街道を南西に下り、11/3 ダラパニの手前のトンチェ（1965m）に下りてきた。ここがマナスル街道とアンナプルナ街道の分かれ目である。マナスル街道を歩いてきたほとんどのトレkkerはここから帰って行き、翌11/4からは新たなトレkkerと共にアンナプルナ街道に踏み出した。途中、GHTのルートを外れて、2泊3日でナムン峠を踏査し、11/10 アンナプルナ街道の中核の町・マナン（3540m）に着いた。マナンの宿からは東からアンナプルナⅡ、Ⅳ、Ⅲ、そして正面にガンガプルナを望むことができた。1日休養の後、11/12 最後の峠越えとなるトロン・ラ越えに出発した。ムクチナート、ジョムソンに出るには、トロン・ラを越えねばならない。

11/12 レダー（4200m）、11/13 ハイ・キャンプ（4833m）と進み、11/14がいよいよ峠越え、4:45に出発した。トロン・ラへは出だしの登りが急で、後半は緩やかになる。暗い中を1時間登ると営業小屋があり、ミルクティーを飲んだ。左右は白いのだが、道にはほとんど雪がなかった。シーズンも終盤だが、続々とトレkkerが登ってきており、その数はラルキャ・ラを上回るほどだ。ロバにまたがって峠に向かう西欧人もいる。7:40 トロン・パス着。左手に白いトロンピークが聳える広い峠であった。下りもたくさんのトレkkerと共にひたすら下りて行き、ヒンズー教、仏教双方の聖地ムクチナート（3760m）に着いたのは13:55であった。ムクチナートを見下ろす寺院からはダウラギリ（8167m）が立派であった。この日の行程は9時間10分。

私はアンナプルナⅠ峰を1988年(昭和63年)に1週間のトレッキングで南側から望んだことがあった。当時、西遊旅行の江崎さんという方が「少しでも行ってみたい気があるなら、是非、GIANT（8000峰）を見てください。世界が変わりますよ！」と熱心に背中を押してくださった。実際、あの時、ヒマラヤ

に来たことで意識が変わったのかもしれない。富士山連続登頂も青梅マラソン連続出場もその翌年（平成元年）から続いた。

「人生には別のアンナプルナがある」。人類最初の8000峰の登頂者となったモーリス・エルゾグの「処女峰アンナプルナ」はこの有名な一文で終わっている。私も1988年にアンナプルナを一度見たものの、その後、ヒマラヤに来ることはこのGHTまでなかった。私にとって、別のアンナプルナは、やはり銀行員の生活であったのだ。35年のサラリーマン生活で、成せたこともあれば、成らなかったこともある。得たものもあれば、得れなかったものもある。「人は失ったものに目を向けますが、私は得たものに目を向けます」。これまた、凍傷で失った手足の指のことを聞かれてのエルゾグの名言である。35年の歳月を経て、このような形で再びアンナプルナと相まみえたことがうれしかった。

35年の道というか、糸というかを紡いだのは、入れ替わり立ち替わり、多くの仲間が山行を共にしてくれたからである。ロングトレイルでは、登山技術云々より、健康な体と故障のない健やかな足腰が一番ものを言う。今の私の足を作ってくれたのは多くの山仲間には他ならない。感謝の気持ちと共に35年に思いを馳せてのアンナプルナ街道であった。



トロン・ラにて

以上

## 続・夫婦の海外トレッキング

山形 裕士

ACKU ニュース 44 号に寄稿しました「夫婦の海外トレッキング」では、2017 年 3 月のニュージーランド・サザンアルプスから始まり、同年 8 月のフィンランド・ラップランド、2018 年 3 月のネパールヒマラヤ・エベレスト山群、2019 年 3 月のボルネオ島・キナバル山、同年 8 月のチロル・ドロミテ・南ドイツまでのそれぞれのトレッキングの印象を気儘に書かせていただきました。他にも 2018 年 8 月には南フランスを中心にレンタカーで観光旅行しました。その後、COVID19 感染症拡大で海外旅行は自粛を余儀なくされましたが、今回はそんな中でコロナ禍直前のオーストラリア旅行とコロナが明けた昨夏のアラスカ・カナディアンロッキーの山旅について続編として報告させていただきます。

### 【オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の旅、2020 年 2-3 月】

オーストラリアの山と聞いてすぐに特定の山が頭に浮かぶ人は少ないでしょう。それほど顕著な山がない国です。2020 年 2/27~3/8 の 12 日間、いつものようにレンタカーと Motel 利用で夏のニューサウスウェールズ州を回りました。州といっても面積は日本の 2.1 倍です。まずはシドニーから南へ向かい Symbio Wildlife Park でコアラ、カンガルー、ワラビー、ミーアキャットなどを見物。海岸沿いに南下して Sea Cliff Bridge や Wollongong 植物園を散策。その日は Bundanoon 泊。

翌日は Tidbinbilla Nature Reserve のトレイル二つを半日掛けて歩き、多数の野生のカンガルーと出会いました。公園からさらに南に向かい Jindabyne を経て冬はスキーリゾートで有名な Thredobo までドライブしました。驚いたことに山の上の方でも制限速度 75 km の立派な高速道路 (Alpine Way) がつけられていました。

3/1 快晴。Thredobo からオーストラリア大陸最高峰のコジオスコ山 (Mt. Kosciuszko 2,228 m) に登りました。途中までリフトがある比較的平易な山です。ただ、その日は強風でリフトの運行が停止しており、麓から歩きました。標高は高くありませんが頂上からの 360 度の展望は素晴らしかったです。猛烈な風の中、結構な距離を歩いたので、七大陸最高峰の一つに登頂したという充実感を味わうことができました。

今回、私達が訪れたのは、オーストラリア全土に広がっていた大規模な山火事が、2 月上旬に降り続いた大雨によりようやく収束した直後でした。Mt. Kosciuszko から下山後のドライブの途中、見

渡す限り焼け山が広がっていました。この山火事によりオーストラリア全土で 23 人が亡くなり、動きが鈍いコアラは最大 8,000 頭が焼死したそうです。そんな焼け野原の中でランチをとることにしました。「圧巻の景色に出くわしたらそこでランチすべし」というのは日頃のハイキングで学んだことです。食事しながらゆっくり眺めた風景は頭の中にしっかりと焼き付けられるからです。はるか彼方まで広がる一面の焼け山を見ると復活には何十年もかかりそうに思いました。オーストラリアの森林を形成する主な樹木は 500 種以上もあるユーカリ (Eucalyptus) です。ユーカリは葉に製油分 (テルペン、引火性) を含む燃えやすい樹木で、山火事の一因ともなっています。ところが驚いたことに完全に焼け焦げた倒木の根元からユーカリの新芽が出ているではありませんか。地下部はほとんど火事の影響を受けておらず、焼けたユーカリの森がもう再生を始めているのでした。新芽の若葉はとても良い匂いがしました。またユーカリは幹の外側が燃えやすく、樹皮が剥がれることで内部が守られています。黒焦げの幹から黄緑色の新しい枝葉がニョキニョキと元気よく伸びていました。胴吹きといわれる現象です。自然発火による山火事は日常茶飯事のようなのですが、ユーカリはこうやって長い年月を生き延びてきたのでしょうか。生命力の強さに感銘を



オーストラリア大陸最高峰 Mt. Kosciuszko 山頂



ユーカリの胴吹き。黒焦げの幹から伸びる枝葉。

受けると共に、この勢いなら数年で緑の森が復活するだろうと確信しました。ユーカリの花言葉が「再生」というのも頷けます。すっかりユーカリのファンになり、帰国後早速ユーカリの苗を数種購入しました。現在、庭ですくすくと育ち、可愛い丸い葉は冬でも青々と美しく茂っています。

Mt. Kosciuszko から北上して Cowra の町に向かう途中、数時間ドライブしてもあまり景色が変わらないオーストラリアのスケールには圧倒されました。さらに Cowra 日本庭園、世界遺産に登録されている 3 億 5000 万年の歴史がある世界最古の鍾乳洞 Jenolan Caves の中の最大の洞窟 Lucas Cave を見たり、Scenic World、ブルーマウンテン国立公園をハイキングしました。その時に同宿したドイツ人夫婦はワラビーが大蛇に絞め殺されているシーンに出くわした時の写真を見せてくれました。まさにそこはジャングルのような熱帯雨林でした。その他、オーストラリアワインで有名な Hunter Valley Garden、タスマニア海の Port Stephens、最後にシドニー市街を観光し、帰国したのは国内で COVID19 感染がまさに拡大しつつある時で、関空で帰国者の隔離措置が始まる寸前のことでした。

### 【アラスカの旅、2023 年 6-7 月】

オーストラリアから帰国後、コロナ禍による鎖国状態の中でもつばら国内の登山を楽しんできましたが、私も古希を過ぎ、歩ける内に行かねばと、ようやく昨年 2023 年夏、3 年ぶりに海外旅行に出かけました。日程は 6/27~7/13 までの 18 日間、行く先は、前半はアラスカ、後半はカナディアンロッキーです。その中からいくつかの旅の印象を書かせていただきます。

6/27 小雨。カナダ航空でバンクーバー経由、アンカレッジ着。夏のアンカレッジは温暖ですが晴天の日は少ないようです。アンカレッジには往復で合計 4 泊するので都心の高級ホテル（1 泊 5 万円以上/室）をパスし、町外れのモーテル（2 万円程度）を利用しました。30 年前の留学時、アメリカ国内のモーテル宿泊料は 5 千円弱でしたからこの 30 年で 4 倍以上の上昇です。物価上昇に比例して賃金も上昇したアメリカ人には問題ありませんが、給料が増えない日本人にとって北米旅行は厳しくなりました。レストランでの食事代や 15~20% というチップにも驚きました。円安である程度覚悟はしていましたがここまでとは思いませんでした。今回、アラスカとカナダでほとんど日本人を見ませんでした。その理由はコロナだけではなくさそうです。代わって東南アジアや韓国の元気な若者が目立ちました。彼らの英語力も平均的日本人より優れていました。

もう一つ失敗があります。空港でモーテルのシャトルを呼ぶことにしていましたが、iPhone が通じず結局通行人に頼んで連絡してもらいました。アメリカの中でもアラスカ州とハワイ州だけは現地の Sim カードを購入する必要があることを後で知りました。ダウンタウンに出かける度に食事に入った店の店員に頼んでモーテルのシャトルを呼んでもらうはめになり大変面倒でした。

6/28 曇り時々雨。「26 氷河クルーズ」という日帰りツアーに参加。26 というのはクルーズ船から見物できる氷河の数です。朝、ダウンタウンの Captain Cook ホテル前よりバスでクック湾北岸沿いの Seward Hwy を東へ 2 時間ほど移動。対岸の山脈が雨にけむり霞んでいるのをじっと眺めているとその荒寥とした広大な風景に寂しさが込み上げ、地球の最果ての地に来たことを実感しました。やがてバスはアラスカ鉄道と併用しているトンネルを抜け Whittier に到着。ここで双胴船 Klondike Express 号に乗船し、Prince William 湾の Bally Arm と College フィヨルドという二つの入江に流れ込んでいる多くの氷河や湾に落ちる滝を見るランチ付き 5 時間のクルーズです。Harvard 氷河では舌端が崩壊して湾に倒れ落ちる瞬間の大音響が船まで届きました。また、Eggs Rock の Sea Lion（トド）、ラッコ、Blackstone 氷河の崩壊、崖に 5000 羽以上の Kittiwake（ミツユビカモメ）が暮らすコロニーなどを見物。氷河の崩壊シーンを売り物にするツアーが成り立つということは、絶え間なく氷河が縮小・後退していることを意味しており憂慮すべきことなのでしょうが、ノルウェーやニュージーランドの落ち着いたフィヨルド見物と比べると、こちらの方がいくつもの大きな氷河に接近して崩壊の瞬間や野生動物にも出会えてアクティブでした。



Harvard 氷河。崩壊の瞬間

6/29 曇り。アンカレッジ駅 (Anchorage Depot) よりアラスカ鉄道 (Denali Star) で Denali 国立公

園へ移動。Denali Star はアンカレッジからフェアバンクスまで1日1往復走っており、途中の Denali 国立公園までは7時間半。スイスの登山鉄道やノルウェーの氷河鉄道のように2階の展望車からビールを飲みながら、あるいは1階の食堂車でランチしながら広大なアラスカの自然を満喫しました。残念ながら北米最高峰のデナリ山 (Mt. Denali, 6,190 m) は雲に隠れていました。なお、1897年にアメリカ大統領名に因んで名付けられた McKinley の山名は、2015年オバマ大統領が正式に Denali に変更しました。Denali は先住民の言語で「大きな山」、「高きもの」、「偉大なるもの」を意味する言葉を語源としています。広い敷地にコテージが散在する McKinley Chalet Resort 泊。

6/30 アラスカに来て初の晴天。Denali 国立公園は四国より広いですが公園内の道路は公園入口から中央部までの細い未舗装道路一本だけで、自家用車のドライブは禁止されています。満員の観光バスでの往復約5時間の Tundra Wilderness ツアーに参加し、運転手のガイドで公園内を回りました。バスは最初タイガ (常緑針葉樹林帯) の中を走りますが、やがて森林限界を超えてツンドラ地帯 (永久凍土地帯) となりました。雪溪の上を歩く Caribou や山頂辺りに生息する Dall Sheep の群れ、平原に住む北極地リスやウサギなどの野生動物に出会う

たびに停車してくれます。Savage 川、Teklanika 川、Toklat 川を越えて Stony Hill で下車休憩し、青空の下、緑の大草原の向こうに連なる山々の雄大な景色を眺めました。最初、青空なのに山々の上に妙に明るく白い雲がかかっているなど思いましたが、それは雲ではなく手前の山々から抜き出て遙か遠くの空中に浮かぶ Mt. Denali でした。麓の平地から山頂まで比高 5,500 m あり、チベット高原からのエベレストの比高 3,700 m と比べても遥かに高いです。Stony Hill から約 60 km ほど離れているにも関わらずその山体の大きさは桁外れでした。そこから先に Mt. Denali に接近するトレッキングコースがないのは残念でしたが、Grizzly Bear との遭遇の可能性が大きく危険です。バスは昼過ぎにビジターセンターに戻りましたが、夏のアラスカは夜の 10 時過ぎでも明るいのでまだ時間はたっぷりあります。午後はいくつもあるトレッキングルートの一つ Horseshoe Lake ハイキングに出かけました。アラスカ鉄道の線路沿いを少し歩くと、クマ (Grizzly と Black Bear) 注意の標識があり、そこから鈴を鳴らしながら Horseshoe Lake を一周しました。池の中央でムース (Moose、ヘラジカ) が水浴びしていました。ビーバーが築いたダムもありました。ユーコン川支流の Nenana 川の岸を歩いている時にも大きなムースに出会いました。



白い雲のように見えた Mt. Denali



Horseshoe Lake で水浴びするムース

7/1 晴れ。Mt. Denali の遠望だけではもの足りず、Denali Air のセスナ機での約1時間の遊覧飛行に参加。乗客は我々夫婦の他にもう一組の計4人。パイロットに副操縦士席が空いているが座りたいかと聞かれて of course と即答。Denali 国立公園の東端にある Yannert Valley の未舗装の滑走路から離陸後、航路を南西にとり山々の間を進むとやがて機体は雪山に囲まれ、氷河の上を飛んで Mt. Denali に大接近し、そこから U ターンしました。真っ白な Mt. Denali と周囲の雪山を眼前にしてその大迫力に感激しました。遙々アラスカまでやって来た甲斐がありました。北壁の Wickersham Wall は Peters Glacier から 4,420 m の高さでそそり立つ垂直の壁で、地球上にこれほど巨大なものは存在しないとのこと。山塊の直径は 64 km に及びます。Mt. Denali 登山の難しさは主として高緯度に位置することによる気温の低さにあり、平均気温は夏でも -20°C、頂上付近では -40°C を下回ることも多いとか。冬期は -70°C 以下の記録もあります。気圧も同高度のヒマラヤに比べて低く冬期の山頂はヒマラヤ 7,000 m 級に相当します。植村直己、山田昇などが冬期に遭難死しています。一般登山ルートは West Buttress からで、Talkeetna (タルキートナ) からの Ski Plane を利用し、Kahiltna 氷河の標高 2,200 m 付近のラ



Mt. Denali の East Buttress. 左の南峰が最高峰 6,190 m.

ンディングポイントから氷河を登行し、いくつものキャンプを経て登頂します。

ビジターセンターに戻り、そこからアンカレッジまでの復路は高速バスを利用しました。途中休憩所の Talkeetna Alaskan Lodge から見た Mt. Denali 南面の大パノラマもとても迫力がありました。南からは独立峰ではなく、Mt Foraker (5,304 m)、Mt. Hunter (4,442 m)、Moose's Tooth (3,150 m)、Broken Tooth (2,758 m) などの山々を周囲に従え、巨大な白い屏風のように聳えていました。

7/2 小雨。アンカレッジ市内観光。アンカレッジ博物館ではアラスカの開拓史や先住民の生活、雪山の絵画などの展示や、科学体験コーナー、カラオケ音響装置などもありました。ダウンタウンを散歩した後に寄ったモーターのおばちゃん推薦の地ビールレストラン (49<sup>th</sup> State Brewing) で夕食。地の果ての地ビールは最高でした。氷河クルーズやアラスカ鉄道の旅、Denali 国立公園はどれも素晴らしかったですが、アンカレッジ滞在中は晴天が一日もなく、物価高や電話が使えないことなどもあり、やや暗いイメージを抱いたまま翌早朝、アンカレッジの街を離れました。



Denali Air のセスナ機

### 【カナディアンロッキーの山旅、2023年7月】

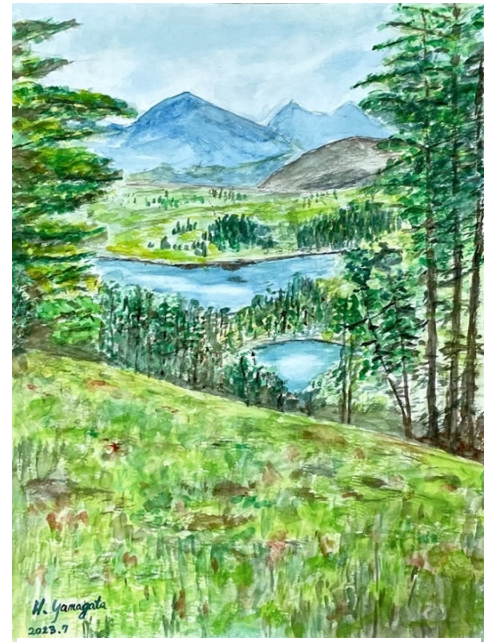
7/3 晴れ。アンカレッジから空路シアトル経由、カルガリー着。空港でナビなしのレンタカーを借りました。今回は Google map を利用します。カナディアンロッキーをレンタカーで北上し、所々ハイキングし、Uターンしてカルガリーに戻る計画です。この日は夜遅いので空港近くの Days Inn に宿泊。

7/4 晴れ後曇り後雹と雷。カルガリーから Trans Canada Hwy 1 号線でカナディアンロッキーへ向かいました。この日は Banff Sunshine Meadows をハイキング。Canmore と Banff の街を通過し、昼前に



展望台から Mt. Assiniboine を望む

Mt. Assiniboine 州立公園 のスキーリゾート Sunshine Village に到着。そこからゴンドラとリフトを乗り継いで Mt. Standish (2,398 m) へ。リフト終点でランチ後ハイキング開始。見たことのない高山植物を撮影しながら到着した展望台からロッキーのマッターホルンといわれるピラミダルな山容の Mt. Assiniboine 3,618 m を眺望。この山は British Columbia 州の Mt. Assiniboine 州立公園と Alberta 州の Banff 国立公園の境に位置しており、この辺りの最高峰です。Mt. Assiniboine へアプローチするハイキングは Grizzly 遭遇の危険があり現在禁止されています。展望台からさらに奥の Rock Isle Lake まで散策。帰りはリフトに乗らず遠回りして歩いていると、遠くに聞こえていた雷鳴がどんどん近づいてきました。さらに突然大きな雹が降り始め辺り一面はあっという間に真っ白に。痛いほどの大きな雹に打たれながらゴンドラ乗り場まで下りましたが、今度は落雷の危険があるためゴンドラの運行停止で踏んだり蹴ったり。代替シャトルバスで登山口の Sunshine Village まで下りました。初日から雹と雷に見舞われるという、カナディアンロッキーの手荒い歓迎を受けました。Canmore のホテルまでの道中、Vermilion Lakes Viewpoint から逆断層がずれて積み重なった特異な山容の Mt. Rundle 2,948 m を眺めました。麓の Vermilion Lake は Bow 川により造られた豊かな湿地帯の一部で水深 50 cm 程の湖です。スゲ、白トウヒ、ヤナギなどの木々が繁茂しています。ロッキー山脈に湿地帯は珍しく、魚の他にサンショウウオ、ヒキガエル、水鳥、サギ、ミンク、ワシなどの野生動物が棲んでいるとのこと。この日から、食料品はなるべくスーパーで調達することにしました。



Rock Isle Lake までの道. 水彩画 A4

7/5 晴れ。私は風邪気味でしたが、今回の旅のハイライト、Lake O'Hara から Lake Oesa まで往復 5 時間程のハイキングをしました。カナディアンロッキーというと Lake Louise が有名ですが、他にも美しい湖はたくさんあります。その一つ、Lake O'Hara は Yoho 国立公園の奥深い山中にある氷河湖で、カナディアンロッキーで唯一自然保護のため入山制限されていて一般観光客にはあまり知られていません。Trans-Canada Hwy から Lake O'Hara までの 13 km の Lake O'Hara Access Road は一般車両通行禁止で、専用シャトルバスに乗車するには 3 ヶ月前に抽選による予約が必要です。Lake Oesa は Lake O'Hara から徒歩でさらに 2 時間半ほど急な斜面を登ったところにある氷河湖で、ハイキングにはガイドの同行が条件です。朝 Canmore のホテルでカナダ人ガイドと合流し車で出発しました。途中で専用バスに乗り換え 11 時頃にエメラルド色の水を湛えた Lake O'Hara (標高 2,035 m) の西端に到着。Day Shelter 休憩所でコーヒーとケーキのサービス。Lake O'Hara は北の Mt. Huber 3,368 m、東の Mt. Lefroy 3,423 m や Glacier Peak 3,283 m、南の Mt. Schaffer 2,692 m の岩壁等にぐるりと囲まれています。周辺には幾つかの氷河湖とそこに至る Trail があります。我々は Lake O'Hara を一周する Lakeshore Trail の北側を進み、分岐して Lake Oesa Trail を登りました。途中、Seven Veils Falls という大きな滝の横を登り、Yukness Lake、Lefroy Lake 等の氷河湖を越えてひたすら登り、13 時半に Lake Oesa (標高 2,270 m) に到着しました。青い氷河湖が目に入った瞬間、その美しさに目を見張りました。Gracier Peak の黒っぽい岩壁を背景にコバルト色の湖水が一層濃く鮮やかに見えました。周囲を 3,000 m 級の岩山と氷河に囲まれた静かな湖畔でランチ後、U ターンして帰りは Lake O'Hara の南側を回り 16 時にバス乗り場まで



Lake O'Hara から Lake Oesa への登り



Lake Oesa



戻りました。日本では見られない高山植物を観察したり、日本で英会話教師をしていたというガイドの説明を聞きながらの楽しいハイキングでした。帰りはガイドが Trans-Canada Hwy の Lake Louise インターを出て Bow Valley Parkway を南下し、Morant's Curve という有名な View Point に連れて行ってくれました。ロッキー山脈を背景に Bow 川のすぐ横をカナダ鉄道の線路が大きくカーブしている雄大な景色を見渡せました。駐車場には Alberta 州の花、ピンクの Wild Rose が満開でした。Alberta 州の車のナンバープレートにも Wild Rose の絵と Wild Rose Country の文字が書かれています。

7/6 晴れ。Moraine Lake から Larch Valley ハイキングの予定でしたが、風邪のため Banff の街を散策、Visitor Center に寄ったり、スーパーで食糧買い出し後 Central Park でランチし、午後は Takakkaw 滝を見物。Waptik 氷原の一部、Daly 氷河が溶けた水が直ちに岩壁を 300 m 程落下し、Yoho 川に合流しています。この滝は、最後の氷河期に Yoho 氷河が深い谷を削ったことにより、多くの支流の谷が Yoho 谷の谷底よりも高い位置に残されて出来た Hanging valley (垂下谷) の断崖を落ちる珍しい滝です。滝の落口からは氷河が展望できますが、そこまでのトレールはありませんでした。Golden 泊。

7/7 晴れ。風邪で発熱。この日もハイキングを諦めて Skybridge など Golden 周辺を観光。午後は Glacier 国立公園の Rogers Pass National Historic Site までドライブしました。Rogers Pass はカナダ太平洋鉄道建設の歴史上重要な所です。

7/8 晴れ。Golden から Trans Canada Hwy を Lake Louise IC に戻り Jasper までドライブ。途中、Crowfoot 氷河、Bow Lake、Peyto Lake などの絶景ポイントは逃さず道草するのでどんどん遅れます。ターコイズブルーの Peyto Lake は特に印象的でした。Parker Ridge Trailhead からは Columbia 大氷河の Athabasca 氷河を眺望しました。観光客が氷上車から降りて氷河の上を歩いているのが望遠レンズで見えました。Athabasca 氷河歩行は Lake Louise と共に観光客の人気スポットになっています。Jaspar 泊。

7/9 晴れ。私の体調が戻ったので Mt. Robson 州立公園をハイキングしました。Jaspar から西に Hwy #16 を 20 km ほど走ると Alberta 州から British Columbia 州に入り時計が 1 時間遅れました。公園の観光案内所前からカナディアンロッキーの最高峰で堂々たる風格のピラミダルな独立峰、Mt. Robson 3,945 m を仰ぎました。地層が幾重にも積み重なった縞模様の巨大岩壁の上部に雪を抱いて堂々と聳え立っていました。今まで見てきたカナディアンロッキーのどの山よりも威厳がありました。観光案内所からさらに車で 2 km 入った駐車場から Kinney Lake まで、高山植物を見ながら片道 4 km のトレールを往復しました。Kinney Lake は Whitehorn Mountain を映す美しい湖で静かなハイキングを楽しめました。Jasper 泊。



Mt. Robson 3,945 m. 水彩画 F8



Kinney Lake. 水彩画 F8

7/10 晴れ。Banff までのドライブウェイは絶景のオンパレード。途中 Lake Louise に寄りましたが、あまりの人の多さに驚き早々に退散。Banff 泊。

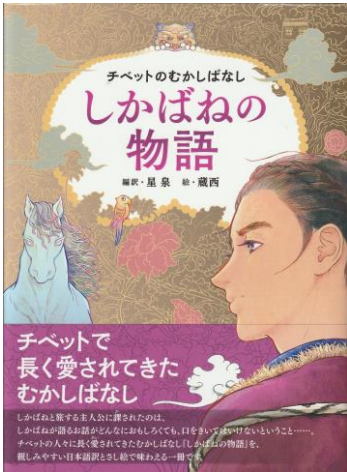
7/11 晴れ。カルガリーで Stampeed のロデオ大会を見物しました。観客の多くは男女ともテンガロンハットにウェスタンブーツ姿。雰囲気からしてクレージーなイベントです。カウボーイやカウガールが荒馬や猛牛を乗りこなしたり、結構危険な種目もありました。種目毎に最初に数名の選手が大型スクリーンで紹介され、振り落とされるまでの時間や姿勢などを競います。競馬のようにお金を掛けるギャンブルでもあり、大いに盛り上がっていました。

7/12 晴れ。カルガリー空港でレンタカーを返却し、空路バンクーバー経由で、7/13 に関空に帰国。蒸し暑い日本に戻り、夏のカナディアンロッキーで快適に過ごした旅が懐かしく思われました。

# チベット関係書籍の紹介

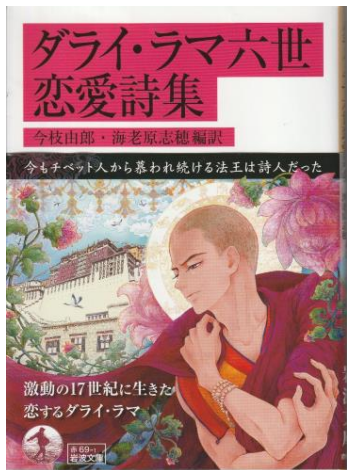
大竹口誠治

前回に引き続いて、現代チベットを代表する本と昔から伝えられている格言集をご紹介します。



## 1. しかばねの物語 (チベットの昔話)

洞窟に住んでいる修行僧に助けられた主人公が、修行僧の命により、森の中の墓場にいるしかばね(亡骸、恵みをもたらす宝物)を洞窟まで運んでくることになったが、しかばねが語る話がどんなに面白くても、口を聞いてはならない、口を聞けば、墓場に戻ってしまうということで、何度も失敗を重ねて、洞窟まで運んで来る物語。元々はインドの物語ですが、仏教伝来とともに、もたらされたもので、ネパール等でも似たような話が伝わっています。本書は、親しみやすい日本語訳、漢字のひらがな表記、挿し絵もあり、子供達でも読める物語になっています。(のら書店、1600円+税)



## 2. ダライ・ラマ六世恋愛詩集

ダライ・ラマ6世は、5世の転生者とされる化身ラマで1697年に即位するが、禁欲的な生活になじめず還俗し、以後は恋愛と即興の歌作りをして暮らしたが、最後は、不可解な死を遂げた。ダライ・ラマ6世の恋愛詩は今でも多くのチベット人により口ずさまれているが、その理由は、ヒマラヤ南麓の温暖な気候への憧れや、修行と恋愛の間で揺れ動く心情からにじみ出る背徳的な味わいや甘美さと躍動感のあるリズムと言われている。以下に、代表的な詩を1つ、掲載したい。(岩波文庫、500円+税)

ཤར་རྒྱལ་ལ་རི་བོའི་རྩེ་ནས།  
དགའ་གསལ་ལྷ་བ་ཤར་བྱང།  
མ་སྐྱེས་ཙམ་མའི་ཞལ་རས།  
ཡིད་ལ་འཁོར་འཁོར་བྱས་བྱང།

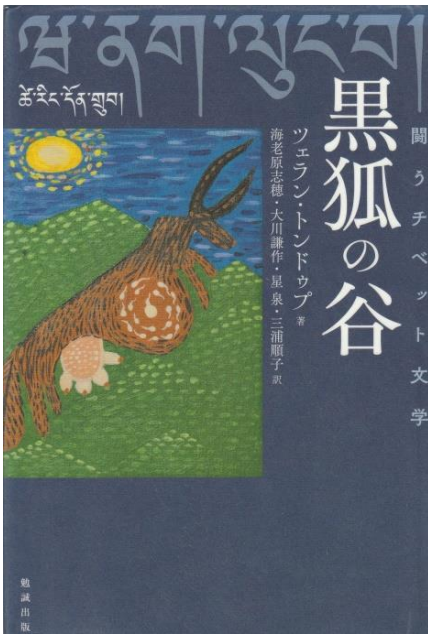
シェーチャーリウエイツェーネー 東の山の頂に  
カルセーダワシェーチュン こうこう白く月昇り  
マゲアメーシェーレー かの乙女子が面影は  
インラコルコルチェーチュン 我が心にぞ現わるる



## 6. チベット女性詩集

本書は、現代チベットを代表する女性詩人7名による27編に詩を翻訳した作品集で、1編のみ紹介したい。(段々社、2,200円)

(消えないでほしいと思う)  
一つ二つと石を積み重ね 王の城が出来た  
それがポタラ宮 消えないでほしいと思う  
一字二字と文字を書き連ね 文明の宝蔵が出来た  
金の絵のようなチベット文字消えないでほしいと思う  
一人二人と善良な者たちが集い 人々の集団が出来た  
チベットという暖かい家族 消えないでほしいと思う



#### 4. 黒狐の谷

著者のツェラン・トンドゥブ氏は、現代チベットを代表する小説家の1人で、批判精神に富んだ作品が多く、高僧であれ政府の役人であれ、一般の民衆であれ、著者の鋭い批判を免れることは出来ない。よく取り上げられるテーマの1つに仏教界の腐敗があるが、その背景には、仏教の思想自体は優れていても、実践する人間（つまり高僧）が腐っていることがよくあるという著者の考えがある。

本書は、1988年から2016年までに発表された作品の選集で代表的な作品としては、役人の腐敗と閻魔大王の裁定を面白おかしく描く「地獄墮ち」、生態移民政策により移民村に移住した人々の厳しい現実と悲劇を描き、表題にもなっている「黒狐の谷」等がある。多くの作品にアラク・ドンと言う高僧が登場するが、この高僧は、地元の人々に崇め奉られている化身ラマ（転生活仏）であるが、一方で小賢しく、ずるく、いざという時には迷わず遁走する、どうしようもない人間として描かれており、高僧批判がよく表現されている。（勉誠出版、3740円）



#### 5. ここにも激しく躍動する生きた心臓がある

著者のトンドゥブジャは、仏教文化伝統の縛りが極めて強かったチベット文学に斬新な口語的表現を導入して、男女の感情の機微や普通の人々の心のうつろいを描き、チベット文学界に新風を巻き起こした作家であったが、32歳という若さで自殺した伝説の作家であり、チベット現代文学の祖として今でも崇められている。本書は、著者の代表作15作品を集めたもので、表題の「ここにも激しく躍動する生きた心臓がある」は自由詩で、チベットの伝説的な歴史を滔々と語り上げチベット人達に未来への希望を情熱的に説いている。他の代表作としては、悪事を働く偽の化身（転生僧）が登場して、信仰心に篤いチベット人の民衆を騙す「化身」、親の思惑によって若い男女の愛が引き裂かれるという「霜にうたれた花」等がある。全作品を通して、チベットの旧習（例えば、結婚相手は親が決める等）に対する批判的なまなざしも特徴になっている。また、チベットの昔からのことわざ引用されている部分が多く、次に紹介する「サキヤ格言集」も参考になる。（勉誠出版、3600円+税）

#### 6. サキヤ格言集

著者のサキヤ・パンディタは13世紀のチベットの人で、学者であり、政治家でもあった人で、今でも人々に愛されている格言をまとめた作品である。多くの格言が掲載されていますが、特に気に入ったものを3つ程、紹介したい。（岩波文庫、絶版、中古品あり）

- ・ 功德のある人の所には、人は集まらなくても、集まって来る  
芳しい花は遠くにあっても 蜂は雲のように集まって来る
- ・ 裕福な時には誰もが親戚で、貧乏になったら誰もが敵  
宝島には遠くからでも人が集まり、湖は乾いたら誰もが棄てて行く
- ・ 自分が好まないことを 他人に絶対してはならない  
他人に少しでもそうされたら 自分がどう思うか考える



### 第三章 紀行・随想・活動報告（国内編）

#### 「山岳会同世代\*の集まり」

田中信行

\*同世代とは神戸大学山岳会在籍の7期から11期までの会員を示します  
2023年は卒後65年（7期）から卒後60年（11期）の集まりになりました

#### 1) 案内状（2023年3月吉日）から

拝啓 春爛漫 良い季節になりました。かねてから65年前に穂高 劔岳 南アルプスで山行を共にした「同世代の会」をと考え七期の東郷賢治氏 八期の豊田寿夫氏 十期の田中俊甫氏そして十一期の岡市敏治氏 田中信行氏にお声がけしご内諾を得ました。

九期の村上勝 黒江章 浜田多喜男そして福本がお世話させていただき、下記の通りの日時  
場所で同世代会を開催致したくご案内を申し上げます。 敬具

記

開催日時 2023年5月24日（水） 午後1時より

開催場所 東天閣（神戸本店） 電話 078-231-1351

住 所 神戸市中央区山本通り3-14-18

会 費 10,000円

ご出席ご欠席の連絡は 福本桂三 TEL 090-1907-2982

村上 勝 TEL 078-594-0931

尚 お誘いしたい方がおられましたら お連絡をお願いいたします

世話人 村上 勝

福本桂三

以上

#### 2) 当日の出席者は下記の通り

東郷賢治 豊田寿夫 田中俊甫 柏田紘 田中信行 小谷辰雄ご夫妻 壺阪祐三

黒江 章 浜田多喜男 村上 勝 福本桂三 （12名）

\*小谷辰雄様は奥様と共に出席されました。唯、尿意や便意が近いため漏らす恐れがあると  
危惧され、記念写真撮影、黙祷そしてご挨拶を済まされたのち 飲食前に退席されました。

\*壺阪祐三（俳名山雲）作

『 五月晴れ ビショップ邸に 老雄集う 』

中国菜館・東天閣は百余年の昔 ドイツ人 F.ビショップが家族のために立てた館

#### 3) 欠席者（返信あり）

斉藤正利 田子秀夫 林 市雄 久保田幹夫 岡市敏治 増田正勝 （6名）

\*斉藤正利様から 10,000円寄付を頂いています

\*久保谷幹夫様からの欠席連絡書

家内が要介護状態のため残念ながら出席できません。盛会を祈っております。

\*岡市敏治様からの欠席連絡書

予期せぬ事態が発生しました。先月の人間ドッグで胃に腫瘍が見つかった。生検の結果、悪性の腫瘍と判明、即入院、手術ということになったのです。今は術前検査中で、5/16入院、月末には退院の見通し、楽しみにしていた5/24山岳会同窓会へ出席できなくなり残念無念の極みです。

（中略）ご盛会を祈念しています。（後記 無事退院されました）

\*増田正勝様からの欠席連絡書

夫正勝は昨年8月に脳梗塞を起こし4ヶ月の入院、リハビリを経て12月に退院、現在に至っていません。失語症がありコミュニケーションは不自由していますが、体は元気でバスで秋吉台等に行きウォーキングを楽しんでいる状態です。お誘いを頂き、ぜひ参加して皆様にお会いしたいと申しあげましたが 「同世代の集い」参加できず、とても残念です。

（代筆 増田キリエ）

#### 4) 式次第

司会 村上 勝 記念写真撮影（12名）

開会の辞 福本桂三

同世代・物故者\*への黙祷

- \* 7期 : 水口一義 西村勝三 宮嶋昭周
- \* 8期 : 山内純二 青木秀哉 中家 章 荻原 サトシ
- \* 9期 : 夏原政雄 河西孝昭 岡田健宏 三輪進一
- \* 10期 : 和田正文 宇田宏成 西戸 勲
- \* 11期 : 岩田和幸 小川成吉 坂本 亨 高橋達夫 篠原 均

出席者の自己紹介 近況報告 特に是非話したい事 他(次項の当日の主な話題を参照)

閉会の辞 田中信行 玄関前で記念写真撮影(10名)の後 自由解散

## 5) 当日の主な話題

### ①千本杉ヒュッテ・テラス増設と設計者武田則明会員について(東郷賢治氏)

武田会員が建設委員長としてまた設計者として大きな貢献があった。

このところ音信不通だったので数回自宅を訪ねた。たまたま会えた時、今度の同世代の集いを話しOKを得た。その後ご子息から外出は問題があり誘わないで欲しい旨云われた。再度山の事務所(ログハウス)の設計にも携わって貰い、大いに感謝しています。

### ②青木・山内の滝谷クラック尾根遭難事故について(豊田寿夫氏)

「山と人」3号1958年「1957年度春山合宿及び遭難報告(水口一義)」及び山内純二氏遺作品2枚(カバー写真)を是非参照して頂きたい。

当時の合宿参加メンバーは水口、斉藤、青木、山内、豊田、中谷、荻原、福本、岡田、村上の10名、本日出席の豊田氏、福本氏、村上氏の3氏が参加しておられた。

### ③千本杉ヒュッテ竣工60周年記念祝賀会について(田中信行)

夏山合宿が終わってから氷ノ山千本杉ヒュッテ建設の第1陣として俊さん共々笹を伐採して更地を造成したのが懐かしい。現在は大学の施設として一般人にも開放し、遭難防止に大いに貢献している。嬉しい限りです。

60周年記念イベントは2022年11月5日から6日にかけてヒュッテに一泊して催された。

出席者は17名、現役学生8名が参加した。山田会長が世話人として活躍された。ここにおられる豊田氏、壺阪氏と田中信も参加した。2000年9月テラス増設と大改修工事が竣工し、2011年10月現地においてヒュッテ竣工50周年記念イベントが行われています。

### ④HNAの発足について(田中俊甫氏)

始まりは私が教職の時ネパールの子供の里親になりどんな子供なのか学校卒業前には是非とも会いたくなりネパールに行った。想像以上に裕福だったのでもっと貧しい人達を応援したくなった。その折、ネパールのNPO団体のバラル氏から山間部に学校を建てて欲しいと要請された。当時の日本の金額で50万円あれば建設可能なので寄付して下さいと。帰国して山岳会、教職仲間、自転車仲間等の皆様にお声がけし学校建設資金の寄付をお願いした。

現地法人のHNP-Nと協力してネパールに小学校を建設することが出来た。その後、山間部に小学校を20余件建設し、譲渡した。残念ながら2015年4月のM8クラスの大地震で大半が使えなくなってしまった。耐震基準が強化され、大地震の復興需要で原材料が高騰したので建設費が倍近くに高騰している。震災から8年経過したがコロナ禍もあって思うように再建が進んでいないのが実情である。

尚、HNP-JはNPO法人を申請し、承認された。初代理事長は高田誠氏、2代目は坂西氏、3代目は鶴谷氏、4代目(現在)は金井良碩氏、歴代の理事長はACKUの皆様です。

### ⑤登山学校方式について(福本桂三氏)

HNA-JとACKUは車の両輪のごとく活躍していて誇りに思っています。HNAのお世話でブータン国を2回訪問した。現在のHNA-J副理事長酒井氏には、現役のころ関西山岳連盟が企画したアラスカ山行に同行して貰った。ACKUからは保坂氏、川口氏、山内敦人氏、田中俊氏と福本、現役から酒井氏と寺島氏が参加、登山学校方式の延長線の山行でした。

登山学校方式はその後の数々の海外遠征に繋がったと思っています。

⑥そのほか、

昭和34年春山の徳本峠超え、夏山の南アルプス縦走、赤塚山の2寮19室等の懐かしい話がいっぱい出ましたが紙面の都合で割愛させていただきました。

6) あとがき

同世代の集まりに出席できたのは元気な83歳から88歳の山男達だった。

皆さん流石に山男、現役時代の登山の話題が沢山出て盛り上がり、また懐かしみました。

「年齢は宝もの。失敗も財産。一生懸命生きてきたことの証だから。今がいちばん花盛り」

日一日と心身共に衰える我々ですが、年齢を重ねて、加齢を華麗な人生にしましょう！

とエールを送ります。(了)



東天閣内にて



東天閣玄関前にて



黙祷風景



記念写真撮影 (小谷様ご夫妻)

## ブナ立て尾根～野口五郎岳～竹村新道

山本 恵昭

体のあちこちにガタがきて、楽しく山に登れる時間も限られてきたことを実感する今日この頃。好奇心に従ってまだ行ったことのない山に行くか、それとも、過去に行って気に入った山を再訪するか。今回は、後者のつもりで50年ほど前に高校の合宿で登った野口五郎岳を目指したが、ついでに以前から行きたかった竹村新道～湯俣温泉へ足を延ばしてみた。

9月23日6時、七倉山荘前についた時には、駐車場はすでに満車。登山補導所の方がすぐ横のスペースに誘導してくださったので何とか停めることができた。乗り合いタクシーで高瀬ダムまで入り、6時40分発でブナ立て尾根へ。しんどいところだ。でも、テント場確保のため、ハイペースで登り続ける。10時半、烏帽子小屋テント場に着いた時には、小屋に近いスペースはすでに満員御礼。でも、少し下って、池の横には広々とした空きスペースがあり、さっそくテントを設営する。なんと、テントの横にはブルーベリーが！

しばらく昼寝をしてから、烏帽子岳山頂を往復。近づいてみると、なかなか凜々しい姿をしている。山頂からテント場へ戻ると、いつの間にかテント場は超過密。隣のテントの距離は5cm。きっと、夜中に私のいびきをご近所迷惑になったことだろう。



テントの横で見つけたブルーベリー



烏帽子岳



烏帽子岳山頂にて

9月24日 早朝、トイレで屈んだときに決めた。昨日、ブナ立て尾根をハイペースで登ってきたわりには、膝の調子は悪くない。外は星空。今日は野口五郎岳往復の予定だったけど、「よし、竹村新道を下ろう」家族等に計画変更を連絡し、ヘッドランプを点けて4時35分出発。ハイペースで野口五郎岳に6時50分着。良い天気。100点満点の景色。赤牛岳～水晶岳が、朝日に輝く。雲海の向こうには、燕岳～槍ヶ岳。Sunshine on my shoulder makes me happy♪って感じ！

この界限のいろいろな山を眺めていると、過去の山行と仲間を思い浮かべて物思いにふけてしまう。先の道程は長いのに、のんびり長居をしてしまった。

7時30分発、真砂岳を越えて、竹村新道へ。上部は、鷲羽岳や槍ヶ岳、硫黄尾根の展望台。下部は、ひたすら忍耐。

湯俣に12時到着。脚はへろへろだけれど、ぜひ見たかった天然記念物の噴湯丘まで脚をのぼす。対岸段丘上の噴湯丘は、思ったより迫力は感じられない。でも、河原のあっちこっちで温泉が吹き出している。何故か流れが黒い。端っこに指先で触れてみると、やはり熱かった。河原で一風呂浴びたいところだが、明日の仕事を考えて諦めた。ふと気付くと、1時間ほど遊んでいた。

湯俣を13時に出て、川沿いの道をひたすら歩く。15時過ぎ、やっと高瀬ダムに到着。待ち構えていた乗合いタクシーで、車を停めていた七倉山荘前まで下った。

最近、山を眺めると、昔の山行や友を思い出す。ほんの数日の出来事が、一生の思い出となって積み重なっていく。これって、凄いことではないかい。

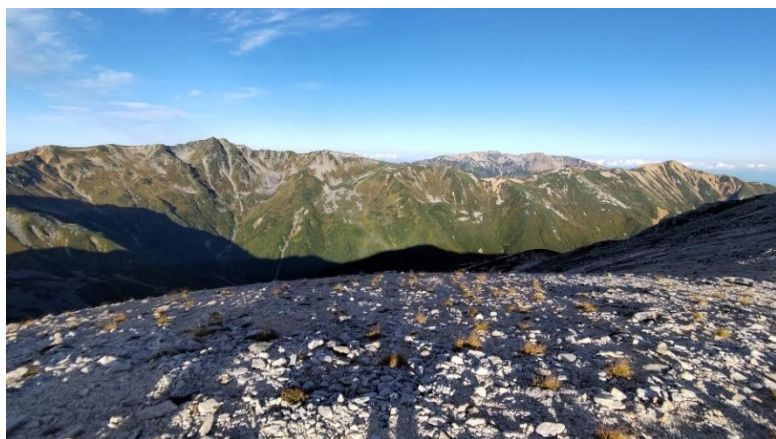
でも、思い出ばかりを追いかけて始めると、人生黄昏時。まだまだ、行きたいところに行くのだ。



野口五郎岳から槍ヶ岳方面を望む



朝日に輝く赤牛岳から水晶岳



野口五郎岳山頂から赤牛岳～水晶岳



湯俣の河原から熱湯噴出



竹村新道上部から、槍ヶ岳、硫黄尾根を望む

以上



## 早月尾根～劔岳

山本 恵昭

富山県登山届出条例がスタートする前に、早月尾根から雪の劔岳へ。天気と雪の状態に恵まれて、サクッと登ることができた。

1 1月3日、馬場島を7時半発。いくらフェーン現象でも、暑すぎる。脱ぎに脱いでとうとう半袖登山。目の前の猫又山に全く雪が付いてないので、テント場で水用の雪がとれるのだろうか、この時期にしたことのない心配事がわいてくる。落葉を踏みしめ喘ぎ喘ぎ登りながら、ふと足元を見るとクリタケがザクザクと生えている。歩みを止めて、大量収穫。欲張り爺さん、重荷がさらに重荷に。

早月小屋に12時着。積雪約5cm。かろうじて、水作り用の雪は確保できた。夕食には、カレーメシと具沢山のキノコスープ。クリタケは旨いキノコだ。

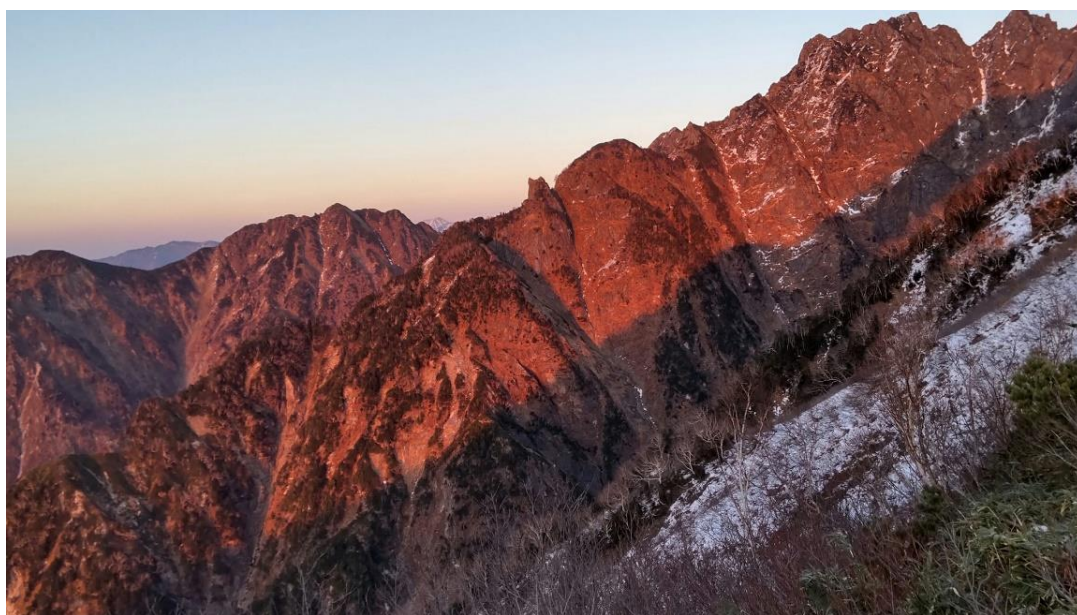
夕方、小屋前の丘に登って、じっくりと景色を満喫。沈む夕日に照らされて、しだいに小窓尾根が赤く染まる。オレンジ色の空に3本の白く輝く飛行機雲が交差していくのを、ぼんやり見守るのもまた面白い。

4日、5時半にヘッドランプをつけて出発。風が強く、雪煙が舞う。先行3パーティが手間取っている間に、お先に失礼。カニのハサミはトレースに導かれて尾根上を進む。雪が中途半端に乗ったナイフリッジとなっていて、とても不安定。恐ろしや！コルへは岩場をクライミングダウンする。二度と通りたくないの、帰りは池ノ谷側のクサリ場を通った。

劔岳山頂に9時。祠は雪に埋まっていた。後続の元気なお姉さん達に写真を撮ってもらう。どちらを見ても、絶景。素晴らしい。天気は下り坂なので、長居は無用。スタコラサッサと下っていると、数パーティが登ってくる。この時間からだと、きっと下りは恐怖の腐れ雪地獄になるのではと、他人事ながら心配になる。

12時早月小屋に到着。もう1泊の予定だったが、今日のうちに降りてしまおう。ちょっとでも軽量化しようと、ミニエッセンパーティー。13時発。ひたすら下って、馬場島に17時過ぎ。ぎりぎり、ヘッドランプ無しで到着できた。帰りに回収しようと採らずにいたクリタケは、疲れて気付かず通過し回収ならず。残念。

学生時代から何度も通った劔岳。いつ来ても、威厳に満ちた素晴らしい山だ。もう体のあちらこちらにガタが来ているので、今回は人生最後の雪の劔岳となるかとも思っていた。でも、もうちょっと頑張ってみようかな。



赤く染まる小窓尾根



剣岳山頂にて



早月尾根の岩峰



カニのはさみから懸垂下降する後続パーティ



具沢山なクリタケスープ

以上

## 北アルプス表銀座縦走 (2023年9月)

小林 功

今年は COVID-19 も明けて、久しぶりの北アルプス 3,000m の大縦走に行ってきた。メンバは様々なバックグラウンドの友人達。神戸大学山岳会のテーマ：『山と人』を体現するような、山を通じて出会った仲間の人達だ。

・メンバ：5名 (男性3名：小林 (L)、大沼さん、松本さん、女性2名：大村さん、清水さん)

9月18日：

有明荘：4時発～燕岳登山口～合戦小屋～燕山荘～空身で燕岳往復、燕山荘～大下りノ頭～切通し喜作レリーフ～大天荘 (泊)、大天井岳往復

女性2人は岡山から参加。5年前に、大山に登った時に近くの中蒜山で偶然知り合った方々。大沼さんと松本さんは、バックカントリースキーの仲間で、2年前には北海道の大雪山や尾瀬の至仏山と一緒に滑った方々。おまけに松本さんは息子とほぼ同じ年齢だが、沢登りに付き合ってくれる素敵な若者だ。年齢の幅は30歳から〇〇歳まで幅広いが、山を通じて知り合った大切な仲間の方々だ。

前日の17日に安曇野に集合。ちょっと大王わさび農場で遊んだあと、登山口の有明荘に泊まった。開放的な露天風呂があって美味しい料理を食べさせてくれる快適な宿だ。

18日は約10時間の行動を予定して、朝4時に出発。合戦尾根は急登だが、人気のルートで次から次へ人が登ってくる。整備された快適な登山道だ。途中の合戦小屋では冷えた美味しい西瓜を食べさせてくれる。



5時間半かけて3,000m近い表銀座の稜線に出た。燕岳まで往復。ここは花崗岩の大国。本当に可愛いイルカそっくりの岩が空に向かってキュッキュウ鳴いているようだ。蛙岩のあたりは様々な岩の造形があって、子供の心に帰って、登ったり、上でトカゲになって昼寝をしたり、ゆっくりしたい場所だ。次に来る時には燕山荘に泊まって、岩のオブジェを散策する優雅な1日を過ごしてみたい。

燕山荘からはダイナミックな稜線が槍ヶ岳へ向けて続く。9月後半にしては、気温が高く、合戦尾根は暑かったが、主稜線を歩く頃は、ガスが懸かって来て雨も降り始める。折しもハイマツの影、そこかしこから可愛い鳴き声が聞こえる。雷鳥のつがいトコトコ姿を現す。天気が急変する際に現れる鳥だけど、その姿は私達を癒してくれる。

大下りノ頭からは一気に下って、また登り返すことになる。切通岩／喜作レリーフに掛かる頃には天候も悪化して  
おどろおどろしい雰囲気漂う。切通し岩の対岸の梯子から上部はガスが懸かっているせいもあり、屹立して見える。しかし近くまで登ってみると、広い登山道が整備されて何のことはない。



大天荘は左側へ更に登る。この日の10時間を超える登りのフィナーレはきつかった。大天荘に荷物を置き、大天井岳をアタックした。大天荘は、夕食後はランプが灯る素敵なバーに変わる。でも皆明日も長いので早めに休むことにする。



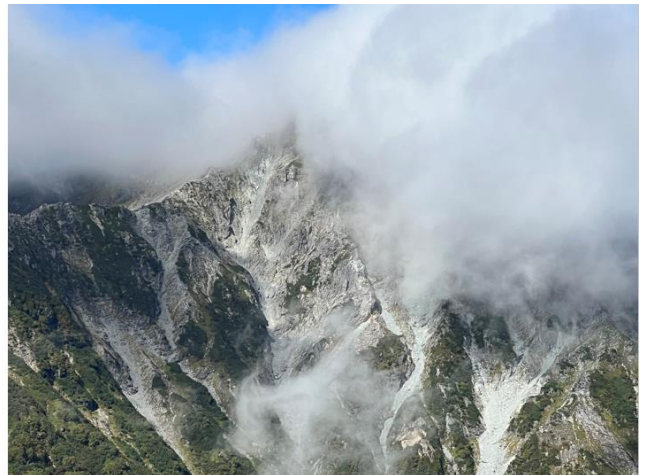
9月19日:

大天荘～大天井ヒュッテ～西岳～水俣乗越～東鎌尾根～ヒュッテ大槍(泊)、槍ヶ岳頂上往復の予定であったが、メンバが足を痛めたため、水俣乗越から下山を決定。槍沢から横尾、横尾山荘(泊)

4時、ガスの中を大天荘から槍ヶ岳に向かう。次第に夜が明けて、空は鮮やかで美しい彩りを見せてくれる。



はるか北鎌尾根が見えて来た。多くのドラマを生んだ長大かつ峻険な尾根。そして天に屹立する槍ヶ岳。



我々は東鎌尾根から大槍ヒュッテに向かう予定であったが、メンバが足の不調を訴えたため、水俣乗越からエスケープルートを取ることにした。横尾山荘で泊まる。



9月20日：横尾山荘～上高地

長い縦走も終わり、上高地で寛ぐ。槍ヶ岳には登れなかったが、久しぶりに充実した山行を楽しめた。

## ご当地アルプスを「やり込む」

川端 充

ゆるふわアウトドアコミック「ヤマノススメ」で紹介された埼玉県の低山の連なりが飯能(はんのう)アルプスだ。コミックの聖地巡礼として訪れる若いハイカーも多く、脚光を浴びている。全区間歩こうとすると一般的には2〜3回に分けるところを、どういうわけか「できるだけ繋いで歩いてみよう。途中でエスケープができるし」とあまり深く考えず、お気楽な気持ちでかけた。

西武秩父線正丸駅で下車し、まず伊豆ヶ岳を目指す。男坂という鎖場はまあまあ長く「これがアルプスね」と納得。そこからは岩々しいところもなく尾根筋を基本的に高度を下げていくのだが、延々とアップダウンを繰り返す。登っては下り、下っては登りを繰り返していると、決定的な悪場はないのだが、真綿で首をしめられるような、気力体力が吸い取られていくように消耗する。事前の腹積もりの通りエスケープして下山すればよいのだが、なぜか「なんとか歩き通してやろう」と欲が出てきた。暗くなってきたが、ヘッドランプを取り出す時間が惜しいくらいだ。高度を下げるにつれ尾根筋の両脇に迫る住宅街にはわき目もふらず尾根を突き進む。最終ピークの天覧山に到着したのは日没20分ほど前のこと。すぐ下の神社に駆け降りると街灯のついたアスファルトの道がついていて無事ゴールできた。こんな登りがいのある日帰り登山になるとは思いもしなかった。

ご当地アルプスと言えば、日帰りの「ちょっとした」岩稜や展望のよいハイキングコースだ。「ちょっとした」というところがミソで、行ってみたら「まあそうかな」となるなら良いほうで、「これが？」となることもままある。でもそのチープさがなんだか愛おしい。

そんなご当地アルプスが最近なんだか増えているような気がする。SNSで情報が簡単に入る時代だからかもしれない。秩父の「小鹿野アルプス」は岩稜ルート、関西だったら「小野アルプス」をはじめ兵庫県はアルプスだらけだし、岡山の「和気アルプス」も面白そうだ。

ハイキングで物足りなくなったら、距離を延ばしたり、電車バス利用の縛りをかけて、ご当地アルプスを「やり込む」のも面白い。

静岡県の沼津アルプスには一般的な(表の)縦走コースの他に「奥アルプス」というのがあるらしい。奥というのに惹かれてしまう。せっかくなので初冬の良く晴れた日に奥から表につなげてみることにした。伊豆箱根鉄道の本原(ぼらき)駅から登り始める。富士山が雪をまとって真っ白だ。大きく凹んでいる宝永火口が山腹正面に見える。山の標識は手作り感が満載でほほえましい。日曜のお勤めだろうか、お寺の太鼓の音もすぐ近くに聞こえる。この稜線は標高400メートルに満たない山をつなぐので、生活の音がそこかしこから聞こえてくる。

「ここから先は許可をとってください」との看板があった。SNSで記録を見る割に「奥アルプス」の公式案内がないのは私有地を通るからのようだ。通る人が全員許可を取っているとは思えないが、ルートはロープあり梯子ありで整備されていてしかも楽しい。やがて尾根が北に向きを変えると左手に青く光り輝く駿河湾を見下ろすようになった。海が見えるとなぜか気分があがる。香貫(かぬき)山の展望台に上がると、富士山がすそ野を広げ、駿河湾の海岸線は大きな弧を描く。その向こうに南アルプスの聖、赤石、荒川が雪の白い稜線を連ねている。抜群の展望だ。アップダウンは多いがこの眺望がすべてを帳消しにしてくれる。アルプス度合格だ!



香貫山からみた沼津アルプス

さて、JR 中央線沿いに滝子山という山がある。秩父の南の端にあたりハイキングガイドにも載る山だけど、「それだけを登りに行くのはもったいないなあ」と思って考えていると、大菩薩嶺から稜線が延びていた。かつて小金沢連嶺と呼ばれていたこの稜線は、最近トレイルランニングの大会開催に合わせて「甲州アルプス」と呼ばれるようになったと知った。トレランの人以外でも日帰りで歩き通す人がいるようだ。相手にとって不足なし。よ～し、やってみるか！

上日川峠のバス停に着いたのは午前 8 時 40 分。大菩薩嶺に登るのは 2 度目で、なんなく稜線に上がることができた。コロナ禍だった前回に比べて登山者は多いけれど大菩薩峠から稜線を南下し始めるとぐんと人が減る。コマツガやシラビソの森林と草原が交互にあらわれ、しかもきょうはお天気がよくて富士山をずっと見ながら歩くことができる。素晴らしい稜線だ。女性のハイカーとすれ違った時「最高ですね」と声をかけると、「ほんと」とあふれるような笑顔が返ってきた。アルプス度 MAX だ。

登山者が少ないからか道標は少なくテープは少ない。落ち葉で道を見失うところがあって倒木もある。やがて尾根が入り組んできた。残る行程がまだまだあることに気づきギアを上げた。どうやら今回も日暮れとの競争となりそうだ。滝子山 16 時をタイムリミットとして先を急ぐ。「行ける？行けない？いや、行ける」何度も自分に問いかける。

中央線の笹子駅への分岐を見送って左肩の尾根に上がり、そこからひと登りすると滝子山の頂上だった。15 時 55 分、ぎりぎりだ。山頂からその先に道が続いているが「寂しう尾根、南稜で危険」と書かれている。地図を見ると駅への直線的なルートだった。日没が迫り、先ほどの駅への分岐に戻るのもどかしい。「なんとかなるやろ」と突っ込んだ。

相変わらずテープを見かけない。道は岩場に突き当たるようになり、薄暗い森の中を右に左に踏み跡を探す。「これおかしいな」と気づいてスマホの GPS を確認したら案の定ルートから外れていた。藪の中をトラバースして正規のルートに戻る。早めに気づいてよかった。

日没は 17 時 20 分ごろのはずだ。「焦るな、焦るな」自分に言い聞かせて注意深く急斜面を下っていく。すると――

今度は足が攀った。最初は片方だったが、足を延ばして直そうとしているうちに、もう片方の足も攀ってしまった。

「うそやろ？」泣きそうになる自分に笑ってしまう。分岐の道を選ぶのが正解だった。

そんな寂しう尾根も下部は穏やかになってきて結局日没頃に林道に着くことができた。

まだ終わらない。笹子駅にこだわったのには理由があった。中央線の車窓から見ていつも気になっていた「笹一酒造」だ。街灯もまばらな笹子の集落を早足で駆け抜け 18 時の店じまい前に滑り込んだ。手ごろな値段の純米酒を手に入れリュックに詰め込んだ。

きょうはいろいろあったなあ――すっかり日が暮れた無人駅のホームでひとり列車を待った。



甲州アルプスの稜線

以上

## 近隣旅行記～秩父・飯能～

近藤 昂一郎

梅雨の最中の今年の6月下旬、非日常を求め遠出をしたくなり、とは言え、何でもない土日のため、あまり移動に時間をかけたくない。旅先を検討した結果、秩父・飯能方面に1泊2日の旅行の運びとなった。

旅行1日目の6月24日、梅雨の最中だが、気温は暑く、また幸いにも天気にも恵まれた日となった。ただ、なかば思い付きの旅行のため、飯能の山間の宿を確保はしていたものの、特に行き先は決めておらず実際の旅程はノープラン。困った時のGoogle検索。宿方面を検索し、決まった最初の目的地は、「埼玉県立 自然の博物館」(秩父郡長瀨町)。

### 埼玉県立自然の博物館

博物館に入ると、まずは巨大ザメ「カルカロドンメガドロン」(全長約12m)の復元模型がお出迎え。県内でカルカロドンメガドロンの歯の化石が多く見つかったよう。何の予備知識もなく訪問したためインパクトは大きかった。巨大ザメの他、海獣「パレオパラドキシア」(世界で最も多く発見)の化石の展示、埼玉の森林や動物たちの姿を再現した大きなジオラマ。中々見ごたえのある展示の数々に子供達も楽しめた様子。

### 宝登山小動物公園

次の目的をGoogle検索、博物館の次の目的地は車で少し行った先の宝登山の山頂にある動物公園。目的地である宝登山小動物公園までは登山道で行けるようだが、今回は宝登山ロープウェイを利用。宝登山麓駅付近の駐車場に車を止め、ロープウェイに乗車。15分間隔運行ようで、さほど待つことなく宝登山の山頂に到着。宝登山山頂付近は四季折々の花があり、ロウバイ、梅、福寿草、ツツジ、しゃくなげが見どころのようだが、あいにく、今回訪れた時はしゃくなげの時期が過ぎていたよう。ガイドマップによると目的地の宝登山小動物公園はロープウェイの駅から徒歩7分とのことだが、若干の高低差のためか、意外と距離があったように感じた。さて、肝心の動物公園だが、小とつく割には広く、山の斜面を利用したユニークな作りとなっており、また、園内の移動も高低差があったが、随所に動物用の餌の販売もあり、これまた子供達も楽しめたよう。

### 飯能宿泊

博物館、動物園で遊んだ後は飯能の宿泊宿に向けて出発。今回の宿泊するのは飯能の入間川沿いにある笑美亭。2回めの訪問となるが、周りは静かでのんびりと落ち着き、何よりご飯が美味しいお宿。聞くところによると、登山やサイクリングをされる方もよく利用されるようで、今回宿泊したときもサイクリングにいられていた外国籍の方が宿泊されていた。宿の雰囲気のためか、他の宿泊客の方とも交流しやすく、この日も夏には少し早い花火を一緒にした。このような一期一会も旅行の醍醐味の一つに思う。このあたりではホテルが見られると宿のご主人に話を伺い、花火の後に夜の散歩。夏山特有の匂いや夜風を感じながらホテルを探索、(少し川から離れているため恐らくだが)自然の中のホテルを鑑賞し、子供達には良い経験になったのではないかと。余談だが、笑美亭の旧館では、宮崎駿監督とスタッフが逗留され「風の谷のナウシカ」の構想をされたよう。

### 入間川川遊び

2日目の6月25日、この日も前日に続き天気にも恵まれた。この日は入間川で川遊びの予定。入間川沿いは所々に川遊びができるスポットがあり、また、手ぶらでBBQなどができるような箇所もある。当初は宿から下流に少し行った先で川遊びをしようかと考えていたが、宿の方に川遊びスポットをお聞きし、車で5分程度の大鳩園キャンプ場が良いとのこと、少し上流に行ってみることに。大鳩園キャンプ場に到着すると、当日利用の際の案内紙が張り出されており、記載されている番号に電話をする。若干電波状況が怪しかったが、無事通話。後ほど駐車料金の精算に来られるとのこと、空いている駐車場に停めて早々に川に向かう。岸边に着くと、キャンプをされていた方々が、丁度片付けをしている最中。キャンパー達が帰られると、岸边にいるのは我が家だけ。少し寂しい気もするが、貸切状態で、周りを気にすることなく遊びに没頭できる。比較的上流ため水が綺麗で、深さがなく、流れも穏やかなため安心して遊ぶことができる。川の遊び方は様々だが、個人的には溝を彫り、石を利用したちょっとした新たな川の流れを作るのが面白い。子供達と一緒に一通り岸边で遊んだ後、気分を変えて上流に向かって探検開始。この先の上流には所々にテントサイトがあるようで、少し行った先でキャンパーと遭遇、ご挨拶。さらに進んでいくと沢登りを思い出し、段々と楽しくなってきたのだが、水深が少々深くなり、流れも早くなってきたため、ここで探検終了。元の岸に戻り、しばらく川遊び。暑くなってきたとはい



え、まだ6月の午前、寒くなってきて、遊びに満足してきたところで終了。  
川遊びの後、途中にある温泉で温まり、きれいになった所で自宅への帰路についた。



宿泊宿「笑美亭」の様子

以上

# 幌尻岳登山報告書(2023.9.2~9.5)

大竹口誠治

百名山の中で総合的な難易度が最も高い部類に入る日高山脈の最高峰である幌尻岳（2053M、アイヌ語で大きな山）を新冠コースから登頂しましたので、以下の通り報告します。

当初、2018年7月に登る予定でしたが、山行直前の台風襲来で入山禁止（渡渉が多いとよぬか山荘コースで、過去、何回も死亡事故が起こっている）となり断念、2020年～2021年は新型コロナの感染拡大により小屋が閉鎖されたため断念、2022年は、登山路を渡渉の少ない新冠コース（田中陽希氏がNHKのグレートトラバースで使ったので、俗称新冠陽希コース）に変更したが、これも直前の大雨で途中の林道が閉鎖となり断念したため、登頂まで足掛け6年かかりました。

1. 参加者 大竹口誠治、S氏、K嬢（私以外は酒井利直ACKU会員の山の会のメンバー）

2. 行程

9/2(土)

09:30 新千歳空港着、10:00 S氏・K嬢と合流、その後レンタカーを借りて10時に出発。途中、イオン苫小牧店内にあるモンベルでガス2個を購入（ガスは飛行機で運ぶことが出来ないため）して、11時50分イオン出発。13時40分にイドンナップ山荘への未舗装道路が始まる。約38KMの未舗装の砂利道は凹凸が多く、車高の低いレンタカーでは、底がすれることが多く、2時間程度をかけてゆっくり進んだ。16時前に、イドンナップ山荘着。山荘前には車が10台以上あったが、山荘に宿泊する登山者は、我々とイドンナップ岳に登頂予定の2組だけで、ゆったりと小屋を使わせてもらった。他の車は、新冠ポロシリ山荘に宿泊している人の車のようであった。山荘の周辺は、鹿が数多く集まり、のんびり草を食べており、ヒグマの気配は感じなかった

9/3(日)

07:30 イドンナップ山荘出発→13:25 新冠ポロシリ山荘着

7時半頃にイドンナップ山荘を出発。9時過ぎから、新冠ポロシリ山荘から下山してくる人とすれ違う。1組の夫婦を除いて残りの5～6名は、すべて単独行の男性であった。単独行の場合、ヒグマが怖いと思うが、あまり気にしている様子ではなかった。林道はアップダウンが激しく、おまけに北海道とは思えないような暑さで、バテバテになる。寝袋等を持参しているので、荷物が肩に食い込む。

6時間かけて、ようやく新冠ポロシリ山荘に到着。山荘までは片道19kmの林道で、遠い道のりであった。到着後の14時頃、登頂した大阪のパーティーが下山して来た。登り4時間弱で、天気が良かったので、肩まで往復したりして2時間程、山頂に留まったとのこと。若い人が多く、流石のスピードであった。15時頃に、女性2名を含む6人パーティーが下山して来た。5時に出発したとのことで、我々もその頃には戻って来る計画とした。山荘の周辺はリスが多くいたが、鹿の姿はまったく見かけなかった。ここもヒグマの気配はなかった。

9/4(月)

05:05 ポロシリ山荘発、06:05 渡渉点、07:10 ロープ設置箇所、

07:47 中間点、08:55 水場、09:25 お花畑、10:47 分岐点

10:57 幌尻岳山頂着、11:39 山頂発、12:19 お花畑、15:20 ポロシリ山荘

5時過ぎに新冠ポロシリ山荘を出発し、1時間弱で渡渉点に到着。渡渉点まで沢の高巻きがあり、意外に時間がかかった。渡渉点の水量は少なく、倒木等を利用して 難なく通過した。そこからは前日に大阪のパーティーから聞いていた通り直登の連続で延々と急な登りが続いた。1カ所、ロープを張っている岩場があったが、これも簡単に超えた。総じて、技術的な難しさはなく、体力勝負のコースであった。上部に行くに従って、アブのような虫がたかるようになり、後で確認すると、全員、顔を中心に何か所か、かまれていた。昔、現役の頃に大雪のニペソツ川に行った時に、眼が見えない位噛まれたことを思い出した。連続した急登のため、だんだん、足が上がりなくなり、ペースが大幅にダウンした。森林限界を超えて、遠くから小屋のように見える大岩を通過してしばらく行くと分岐に到着。分岐から10分程で11時頃にようやく幌尻岳山頂に到着した。出発から6時間かかった。頂上では霧で展望はまったく効かず、期待していた日高連山はまったく見られず、残念であった。山頂には、リスやホシガラスがいた。帰りは、ひたすら下り、3時間半余りで小屋に戻った。丁度、S氏の

誕生日の登頂となったこともあり、ワンカップ焼酎で誕生日と無事登頂を祝った。月曜日なので宿泊客は我々のみかと思ったが、16時頃から、続々とガイド連れのツアー客（主に年配の女性为中心）が到着し、小屋は、ほぼ、満杯になった。ガイドの情報では、林道近くでヒグマの親子を目撃したとのことで、明日は注意して行くことにした。夜中に、かなりの雨が降った。

9 / 5 (火)

05 : 45 新冠ポロシリ山荘発、10 : 25 イドンナップ山荘着、11 : 00 同発、  
12 : 00 新冠ダム入口（林道19km）、13 : 10 未舗装道路終点（19km）、  
13 : 50 新冠の道の駅、15 : 30 レンタカー屋着、16 : 15 新千歳空港着、  
新千歳空港のフードコートで打ち上げを行い、17 : 50 分頃解散

昨夜の大雨の影響で帰りの林道の状態が気になるため、新冠ポロシリ山荘を早めに出発。帰りもアップダウンの連続であったが、曇りの天候であったので、暑さは感じず、5時間弱でイドンナップ山荘に到着。林道の周りは広葉樹の森林で、秋には素晴らしい紅葉が期待できるところだった。途中でヒグマの糞を見かけた。年輩の女性を顧客としたガイド登山の一行が登って来た。やはりヒグマは身近にいたようだ。山荘からは、一番の懸念事項である未舗装の林道をパンクしないように慎重に進む。昨夜の大雨で水溜りが増えていたが、何とか2時間余りをかけて、38KMの林道走行を完了した。

山行報告は以上の通りですが、未舗装の片道38KMの林道走行、その後の片道19KMの酷暑の林道歩行、ほぼ、直登に近い幌尻岳の登りと、かなりハードは山行で、百名山の中で総合的な難易度が最も高い部類に入ることを体感した山行だった。



イドンナップ山荘



新冠ポロシリ山荘



幌尻岳山頂にて（左から大竹口、K嬢、S氏）



下山路、奥に見えるのが幌尻湖

以上

## 荒川三山・赤石岳登山報告書 (2023.9.30~10.5)

大竹口誠治

南アルプスは、塩見岳以北は度々、行く機会がありましたが、塩見岳以南はまったく訪れたことがなかったため、9月初旬の幌尻岳山行に同行して頂いたS氏と悪沢岳(荒川岳)と赤石岳を登頂して来ましたので、以下の通り報告します。なお、S氏は、今回の赤石岳で百名山完登となりました。

(自分自身は70座にも満たずまだまだこれからです)

1. 参加者：大竹口誠治、S氏(酒井利直ACKU会員の山の会のメンバー)

### 2. 行程

9/30(土) 11:00 静岡駅発、13:40 畑薙第一ダム駐車場着、15:05 駐車場発、  
16:10 榎島ロッジ着

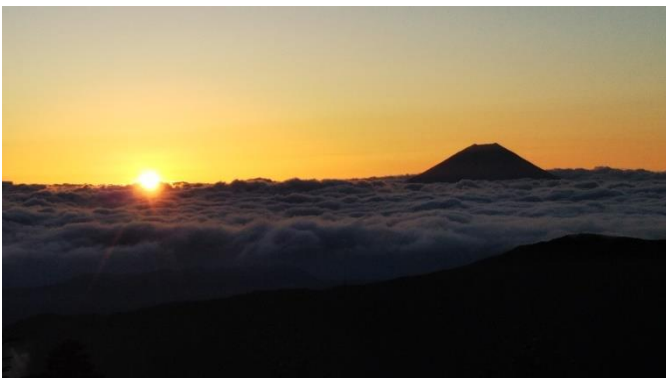
畑薙ダムへのバス便は、8月末で終了しているため、名古屋在住のS氏の車で、畑薙第一ダムの駐車場へ向け出発し、駐車場で特種東海フォレストのマイクロバスに乗せてもらい、16時過ぎに榎島ロッジに到着。榎島ロッジは何人泊まれるのか分からない位大きな、お風呂付の宿泊施設であった。

10/1(日) 06:15 榎島ロッジ発、08:25 林道出会い、10:35 清水平着、11:40 見晴台着、  
13:00 駒鳥池、13:46 千枚小屋着、雨時々雲。

今日は、標高差1500Mを登る、今回の山登りで一番きつい行程のため、ゆっくりとしたペースで登る。雨が降ったり止んだりした中をひたすら登る。傾斜のきつい所があまりないので比較的登りやすかった。小屋に着いた後に、雨が止んで、富士山が綺麗に見えだした。

10/2(月) 06:04 小屋発、06:53 千枚岳着、08:52 荒川東岳着、10:50 中岳着、  
11:05 前岳着、12:10 荒川小屋着、天気は快晴、稜線では風強し

今日は朝から晴天で、富士山に雲海がかかり、素晴らしい日の出が拝めた。小屋から少し急登があったが、後は比較的なだらかな稜線歩きで、千枚岳、荒川東岳、中岳、前岳の頂上を次々超えて行き、お昼ごろに荒川小屋に到着した。前岳の西側は大崩壊地となっており、前岳の頂上も、そのうち、崩壊してなくなってしまうのではないかという位、崩壊が進んでいた。富士山を眺めながら、小屋でビールを飲んで、最高の贅沢を満喫した。



千枚小屋からの夜明け、右が富士山



千枚岳頂上

10/3 (火) 06:25 荒川小屋発、07:15 大聖寺平着、09:00 小赤石岳山頂着、09:36

赤石岳山頂着、10:15 頂上避難小屋発、12:44 富士見平着、13:20 赤石小屋着  
天気は今日も快晴の中、赤石岳の頂上を目指して出発した。小赤石岳の登りが少しきつかったが、後は、なだらかな稜線歩きが続き、9時36分に赤石岳の頂上に到着した。赤石岳で百名山完登となったS氏を横断幕と一緒に記念撮影をし、頂上避難小屋でしばらく休んで後、赤石小屋に向かった。赤石小屋の下りは、斜面をトラバースする道であるが、栈道（さんどう）が多く、岩場もあり、歩き辛かった。当初、8月上旬に本山行を計画していたが、台風のため、延期したものであるが、その頃行っていたら、確実に熱中症にかかっていたと思われ、延期してこの時期にして良かったと思った。赤石小屋に到着して、百名山完登の祝杯を挙げた。丁度、S氏（70歳）と同じ年齢の女性で、この日に百名山を完登された方も赤石小屋泊まりであったので、小屋の管理人からお祝いお酒を頂いて、祝杯となった。ただ、残念ながら赤石小屋ではネットは通じず、頂上の記念写真は、下山後となった。



荒川東岳（悪沢岳）山頂



荒川前岳から中岳と東岳（奥）を望む



小赤石岳から赤石岳を望む



赤石岳山頂

10/4 (水) 06:26 赤石小屋発、08:38 樫段着、10:00 樫島ロッジ着、12:00 樫島ロッジ発、  
13:30 畑薙第一ダム駐車場発、16:00 静岡駅着

樫島ロッジ12時発の送迎バスに間に合うように、6時半頃、赤石小屋を出発。夜は、かなり激しい雨が降っていたが、小屋を出発するころには小降りになり、樹林帯の中をひたすら下った。標高差からかなりな急傾斜の下りを予想したが、つづら折りの道が多く、思った程ではなかった。予定より早く、10時に樫島ロッジに到着し、着替えや食事をしてバスの出発を待った。畑薙第一ダム駐車場からSさんの運転で16時頃に静岡駅付近に到着し、駅内の静岡おでん屋で祝杯を挙げた。

以上

## 第251回例会山行（氷ノ山ヒュッテ整備）報告書

藤川 佳祐

日時 : 2023年6月17~18日

参加者 : 13名 以下敬称略

山田、東郷、壺阪、山本（恵）、藤川

大矢、三谷、後藤、程、美崎、新留、岩田、村上

随分と久しぶりの氷ノ山である。例会として訪れたのは恐らく前回は2021年3月、2年と少し期間が空いてしまった。当時はコロナの影響がやや薄れてきたころ、いわゆる自己責任で各自が動き出したタイミングであったと記憶している。ただし今回は正真正銘のアフターコロナ、普通の氷ノ山山行が戻ってきた。個人的な話ではあるが、2022年の4月付で東京へ異動。慣れ親しんだ関西を離れ、神戸大学並びに山岳部の様子もすっかり分からなくなっていた。どんな様子なのかと、六甲集合の際は少し不安もあったがすぐに解消。まず人数が多い、8名。様々なバックグラウンドを持つメンバー達、賑やかで何よりである。

肝心の氷ノ山ヒュッテの方はというところらも健在、デッキのボトム部分の木材にひび割れ、水道の不調などマイナーなトラブルはあるにせよ、大きな問題ないように感じられた。天気がとても良く、かといって暑すぎることも無く、整備作業は滞りなく完了した。

(現役の人数が多いという事に加え、電動チェーンソーなる飛び道具まで登場した、)

翌18日は別の予定があり日帰りとなってしまったが、久しぶりの氷ノ山は良かったと素直に感じられるものであった。東京はちょっと登る山が遠い、わざわざ行っても人が多い。

六甲山は言わずもがな、数時間で静かな氷ノ山、恵まれた環境を痛感した山行であった。



## 第253回ACKU例会山行報告書（雷鳥沢キャンプベース）

幹事 山田健／大竹口誠治

元々、ACKUでは、東西交流会を図る目的で、20年以上前から、高木正孝先生のゆかりの地である谷川岳の成蹊大学虹芝寮をベースに、過去、何回か山行を行ってきましたが、会員の高齢化と関西方面からのアプローチが難しいこともあり、直近では開催しておりませんでした。

数年前から、東西の中間地点である上高地や立山にベースキャンプを張って、個々の都合に合わせて集まり、周辺地区の登山を行う案が出て、昨年度も立山ベースで企画しましたが、直前の新型コロナ感染者の拡大を受け中止にしました。今年は、昨年のリベンジを行うべく、広く、会員の皆様のご参加を募りましたが、都合がつく人が少なく、結果として、以下の5名のみの参加となりました。詳細を以下の通り報告します。

来年も同様な企画を計画したいと思いますので、積極的なご参加をお願い致します。

### 1. 参加メンバー及び入山日程

山田健	7月27日～30日
壺阪祐三	7月27日～30日
大竹口誠治	7月27日～30日
山本恵昭	7月27日～29日
坂本 淳	7月29日～30日

### 2. 行程

7月27日（木）：

車で立山駅まで来られた山田さんと壺阪さんと電車で到着した大竹口の3名が14時頃に合流し、ケーブルカー及びバスを乗り継いで、15時半に室堂到着。15時40分に室堂を出発し、16時半頃に雷鳥沢キャンプ場に入り、先に到着していた山本（恵）さんと合流した。

7月28日（金）：

#### （1）山田・壺阪：奥大日岳往復

BC発 6時5分 奥大日 8時30分から9時10分 BC帰着 11時20分

浄土沢に沿って下流へ少し行くと新室堂乗越への登りとなり30分で到着。尾根に出て最初のピークは左を巻き、次のピークは越えて少し下った後、奥大日の本体の南側を斜めに登る。途中ガラ場で雷鳥の親子に遭遇。ひなは2羽いて生まれて間もない様子。親鳥が警告の鳴き声を出していてひなは全く動かない。無事育ってくれることを祈って、稜線に出ると200mほど先に頂上が見えた。この辺りから見る剣岳は最も鋭く見えて格好がいい。頂上で40分ほどかけてスケッチをした。

#### （2）大竹口：立山三山縦走

TS発（06：00）→真砂岳着（07：55）→富士ノ折立着（08：50）→大汝山着（09：10）→雄山着（09：40）→一ノ越着（10：30）→TS着（11：35）

予定では別山乗越から立山三山縦走であったが、山田さん情報では、真砂岳に突き上げている登山道（大走り）も整備されているとのことであったので、そちらから立山三山を縦走して一ノ越経由で縦走した。大走りは少しガレ場が多く、下りには気を遣う道であったが登りは問題なく、真砂岳に登るには最短ルートであった。登山道の途中で、ハイマツの中に隠れた鳥がいたが、ピーピーという鳴き声からイワヒバリのようなようであった。確か、雷鳥の鳴き声は「ゲー、ガッガー」のような、カエルのような鳴き声であったのを思い出した。真砂岳からは、昔、よく登った後立山が良く見え、2回生の時に爺ヶ岳から親不知まで縦走したことを思い出した。雄山の頂上で、龍王岳東尾根の登攀を終えた山本（恵）と偶然、会った。折角なので、雄山の頂上を踏んだが、神社に入るには700円が必要で、ここにもインフレの影響が出ていた。雄山の登り道と下り道は完全に分かれているので、下りで渋滞することはなかったが、一ノ越から登頂を目指す中学生高校生の団体が多く、一ノ越から頂上まで数珠つなぎの状態であった。

(3) 山本(恵)：龍王岳東尾根から立山三山を縦走し、別山乗越からT Sに帰着。  
詳細は後述のフェースブックの投稿を参照。

7月29日(土)：大竹口 一之越から龍王岳、浄土山、雷鳥沢キャンプラウンド

(1) 山田：昨日の大竹口の大走りルートを通って立山三山を縦走  
BC発 5時25分 真砂岳 7時30分 雄山 9時40分 BC 11時40分  
大走りから真砂岳に登り立山3山へ。今日は土曜日なのでひとが多い。雄山の頂上に出たころから人があふれ、一之越への下りから見た登り専用登山道は登山者数珠繋ぎとなり大渋滞している。一之越山荘前の広場は人で埋め尽くされていた。夏山最盛期に一之越に来たのは初めてであったが、こんなことになっているなんて。早々に一之越を辞して雷鳥沢へのトラバース道に入ると嘘のように人がいなくなりほっとして大休止。のんびりとBCへ帰ると坂本がちょうど到着したところだった。

(2) 壺阪：別山乗越を往復

(3) 大竹口：室堂山荘から、浄土山、龍王岳に登り、一ノ越、室堂経由でT Sに帰着  
T S(05:23)→浄土山着(07:50)→龍王岳着(08:00)→一ノ越着  
(08:30)→室堂着(09:10)→携帯の充電等→T S着(10:45)

室堂山荘から浄土山への登山道を通る。途中の展望台への分岐辺りから傾斜が急になり思ったより時間がかかった。龍王岳は1回生の秋の岩登り合宿で登って以来、約45年振りの山頂であった。一ノ越から下りは、坂本さんと連絡を取る必要があったため、室堂経由としたが、途中の雪渓を横切る所が大渋滞していた。昨日同様、次々に小学生や中学生の団体が多かった。

(4) 山本(恵)：奥大日岳から称名滝経由で立山に下山。詳細は後述のフェースブックの投稿を参照。

(5) 坂本：自動車で茅野を出発し、扇沢駅に車を駐車して室堂に向かう。11時頃に室堂に到着して、雷鳥沢キャンプ場へ向かう。12時前に雷鳥沢キャンプ到着後、別山乗越へ向かうも、途中で雷が鳴りだし、雲行きも怪しくなってきたので、1時間程、登った所から引き返した。キャンプ場到着と同時に、雨が降ってきた。

7月30日(日)：

(1) 大竹口、坂本：奥大日岳を往復後、室堂に下山  
T S発(05:22)→奥大日岳頂上着(07:10)→T S帰着(09:15)→T S発  
(09:30)→室堂着(10:40)

まっすぐ室堂に下山する山田さんと壺阪さんに見送られ、奥大日岳に向け出発する。この時間帯は、奥大日岳を目指すパーティーが多く、途中で数パーティを抜かしながら進む。新室堂乗越からは、ゆるやかな登り道が主体で、道がトラバース気味になっているので、体力の消耗は少なく助かった。山田さんと壺阪さんが一昨日見かけたという雷鳥親子に出会えるか期待するも、まったく見かけなかったが、イワヒバリやウグイスの鳴き声が気持ち良かった。T Sに帰着後、荷物の整理を行い直ぐに室堂に向けて出発するも、奥大日岳を往復した直後でもあり、また、荷物も重く、結構な登りであったので、足取りも重く、1時間超をかけて、ようやく室堂駅に到着した。坂本さんは11時15分のトロリーバス、大竹口は11時20分発の高原バスに乗り、帰宅の途についた。

(2) 山田、壺阪：7時頃出発して、8時頃室堂に到着して、立山駅に駐車している車で神戸へ戻った。

(山本さんのフェースブックの投稿より)

昨年はコロナ禍で中止となった山岳会の立山雷鳥沢キャンプ例会山行。今年初めて実施。キャンプはともにして、昼間はそれぞれ行きたいところへというスタイル。  
学生時代に剣岳界限には良く通ったけど、立山周辺は素通りだった。落ち穂拾いというと山には失礼だけれど、まだ行ったことがなくて、今回行ってみたいところは3つ。龍王岳東尾根、立山三山巡り、奥大日岳から大日平を経て称名滝。

7月27日、早朝に立山駅に着くはずが、仮眠し過ぎて10時着。雷鳥沢には13時到着となった。雲行きが怪しいのも言い訳に加えて、「ちょっと立山巡り計画」は泡と消えた。テーブルとベンチの横にテントを張り、昼間からワインをチビチビ飲みながら、山眺め。夕方、3名が加わり宴会モード。



7月28日、龍王岳東尾根と立山巡り。

5時発で、一の越へ。蒼空をバックに、東尾根のギザギザが格好良い。取付きに6時20分。先行パーティーのコールが聞こえて、緊張感が高まる。ガレ場を登り、傾斜の緩い岩場、ハイマツ帯、岩稜、クラック。その場その場で適当にルートを選んで、ノーロープで登っていく。独りだと、ペースが速い。先行パーティーを追い越し、7時40分龍王岳山頂に着いた。岩はザラザラでフリクションが良く、ガッチリホールドもいっぱい。展望は抜群。赤牛岳の後ろに笠ヶ岳と槍ヶ岳のトンガリ。最後はお花畑が迎えてくれる。なかなか良いルートだった。

予定より早く抜けてしまったので、ついでに立山巡りに行こうかと。スマホで予定変更を伝え、雄山へGO！山頂は参拝料が必要ということでパス。大汝山、富士ノ折立、真砂岳と越えていく。別山に着くと、目の前に剣岳。久しぶりの剣御前小屋は人だらけ。雷鳥沢を下って、テントに13時30分。再び宴会となるが、しだいに黒い雲がやってきて、雷鳴轟き、しばらくして雨が降ってきた。汗まみれのシャツとパンツを水洗いしたけど、生乾きで臭さ倍増。

7月29日、奥大日岳から大日平、称名滝へ。

ヘッドランプをつけて4時発。剣岳を愛でながら、順調に奥大日岳に6時。ここから大日岳までは、なかなかのアップダウン。大日小屋からの下りも疲れるが、途中の水場で復活。大日平の景色に癒される。この辺りから、とにかく暑い。称名滝を見ながら下るのかと思っていたが、全く見えず。汗だけで、忍耐の激下り。ヘロヘロで登山口に11時50分。もう称名滝を間近で見に行く気力なく、レストハウスでそばを食べて、バス待ち1時間20分。グリーンパーク吉峰で汗を流し、スーパーで買い出し。その後、ほぼノンストップで、神戸に21時半。

65歳の誕生日を過ぎて、初めての山行。なかなか充実した2泊3日だった。

### 3. (壺阪さん俳句)

40℃ 猛暑列島 立山へ

道沿いに 亭々と立つ 立山杉 (趣あり)

室堂の 雪も消えたり 文月末

這松も すっかり立ち枯れ 地獄谷

雪解けの 谷水汲んで 飯盒飯

イワカガミ チングルマ咲く 尾根筋を (高山植物が丁度良く咲いていた)

雷鳥に 2羽のヒナ生まれ 掻き抱く

奥大日 (岳2606m) の 頂きに立てり 83歳

ばっちり と 剣 (岳) に向き合う 奥大日岳

槍・穂高 薬師 (岳) も見える 奥大日岳

雷鳥沢に 雷鳴り響き 驟雨来る

別山乗越 昨日の奥大日岳は 目の下に

60年前、2年生の夏山合宿の時に、熱中症で気を失った別山乗越 (約2800m) に登れた。後立山連峰の鋭鋒達が前方に立ち並び、左に剣岳、昨日登った奥大日岳は目の下だ。大満足だ。

以上の12句です。

以上



雷鳥沢キャンプ場にて（早朝）



雷鳥沢キャンプ場にて（夕刻）



龍王岳東尾根



浄土山の下りからの一ノ越と雄山



剣岳と早月尾根



坂本さんと奥大日岳

以上

## 山岳会・山岳部 合同忘年会（第254回例会）

長谷川 浩

2023年12月15日に、恒例の山岳会山岳部合同の懇親会・忘年会を開催しました。これまで様々なイベントで利用していた阪急六甲の「六甲苑」が昨年閉店との事で、六甲道駅近くの「居酒屋わん」を予約、平日金曜夜の実施となりました。

山岳部は、小池部長と、今年から副部長に就任いただいた海事科学の水谷先生と現役9名（城間、大矢、三谷、岩田、小田、村上、程、後藤、長屋）、山岳会からは山田会長と5名（山形、居谷、岩井、長谷川、侯）とやや寂しい参加人数でしたが、年末の楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

（文中、敬称略）

以下は、facebook に投稿された終盤の集合写真です。投稿後、居谷さんから「前列左から山田会長、居谷OB、探検部からの岩田君（3年）、中間列左から岩井OB(会計理事)、水谷先生（副部長：海洋）少しとんで工学部応用化学の小田君（2年）、工学部建築の長屋君（1年）、経済学部程君（1年：重慶出身）、後列左から海洋の三谷君（3年）、探検部からの村上君（2年）、農学部の城間君（4年）、侯OB、小池先生（部長：工学）」、、、とのコメントを入れていただきました。

（早退等で、山形先生、長谷川、後藤君が残念ながら映っていません）



## 第五章 山岳部活動報告

### 伯耆大山報告書

記載者；城間

日時：2022/12/29～31

メンバー：城間（CL）、侯（SL）、三谷、大矢、後藤、小田

天気：全体的に風が弱く快適

積雪量：元谷 160 cm

#### 0 日目（12/28）

城間と侯さんの2人は27日発の夜行バスに乗って米子へと移動した。三谷、大矢、後藤、小田は大澤さんの運転で28日の朝に大山寺に着き、大山寺で合流する予定であったが28日の早朝に大澤さんが体調不良となった。そのため、1日順延することとなった。米子市では贅沢に時間を過ごしたが、20 km もサンダルで歩いたのは流石に足に堪えた。後藤駅近くの快活クラブで1晩過ごしたが、臭いとイビキが気になってあまり寝られなかった。メイドインアビスが度し難いほど面白かった。

#### 1 日目（12/29）

大山寺から元谷までのルートは短く、かつ、トレースがしっかりしているので不安になるところはない。元谷では堰堤の下のところにテントを張り、雪洞の作成や水作りなどを行った。昨年と比べて多少雪は締まっていた。

#### 2 日目（12/30）

冬期バリの初級ルートである七合尾根に向かった。終始トレースはついており、トラバースにさえ気をつければ何ともないルートであった。山頂には向かわず下山し、アンカー構築や滑落停止の練習、ビーコン搜索訓練を実施した。1 回生2人で3分以内にビーコンを見つけられるようになったので良かったと思う。雪質がフカフカだったので、アンカー構築には時間がかかった。



#### 3 日目（12/31）

早朝のバスに合わせて下山した。大山のビジターセンターではシャワーが使えるのがとても快適だと感じた。

## 笹山冬季合宿報告書

記載者: 三谷昌輝

参加者: 三谷(CL)、大澤(SL)、小田、後藤

行動時間:

[2023/3/7 0 日目]

三谷、小田、後藤は在来線で身延駅へ。大澤は夜行バスで甲府駅へ。翌日に身延駅に移動。

[2023/3/8 1 日目]

7:05 身延駅 - (バス) - 8:40 奈良田温泉 8:50 - 9:10 笹山登山口 - 12:55 標高 1932 にて幕営

[2023/3/9 2 日目]

5:00 起床 - 6:07 テント場出発 - 9:05 笹山南峰 9:45 - 11:40 白河内岳 - 12:55 笹山南峰 - 14:35 テント場

[2023/3/10 3 日目]

4:00 起床 - 5:40 テント場出発 - 7:45 笹山登山口 - 8:05 奈良田温泉

積雪状況:

- ・奈良田温泉から標高 1603 付近…尾根上に雪なし。標高とともに北側谷にうっすらと雪が見え始める。
- ・標高 1603 付近から笹山南峰…尾根上にも積雪が見え始める。標高とともに積雪は多くなるものの、笹山山頂付近でくるぶし上ラッセル程度。
- ・笹山南峰から白河内岳…基本はくるぶし上ラッセル。一部分で膝まで埋まる箇所あり。

前書き:

当初は

奈良田温泉 - 笹山 - 大籠岳 - 農鳥岳 - 大門沢小屋 - 奈良田温泉

と計画していた。しかしながら、大門沢にて大規模な雪崩が発生したとの情報が 2/26 にあった。そこで今回はこのような計画とした。

行動詳細:

活動前日、1,2 回生は身延駅にてステビバを行った。予想はしていたが、駅構内は閉じられたため外でのステビバとなった。帰りに分かったことだが、利用したバスが身延駅と下部温泉駅を經由して奈良田温泉についたため、無人駅である下部温泉駅にてステビバをすれば良かった。またそうすればバス代も 200 円安くなった。

1日目、奈良田温泉到着後、どこを見ても雪がない。相当量のラッセル覚悟で来ていたので、驚いた。その後登り続けても2時間ほど全く雪がでてこなかった。途中水作りができないのではと焦ったが、しばらくして尾根上にも雪が現れだしたので少しほっとする。アイゼンは途中路面が凍っている箇所があり、雪が見え始める前から装着した。テントは2日目に移動させないでおこうということになり、予定通り1932に幕営した。テント場としては風もほとんどあたることなくいい場所であった。幕営後は各々ゆっくりすごし、一晚過ごした。

2日目、テントは張ったままにするため、5時に起きて6時に出発した。想定より雪の量が少なく時間に余裕があったため、適度に休憩を挟みつつゆっくり登っていくことにした。笹山南峰では予定より1時間ほど巻いており、ほぼ無風であったため長めの休憩とした。昨日今日と登ってきた笹山ダイレクト尾根は雪の量こそ少なかったものの終始急登であったため大分疲弊していた。

休憩を終え、白河内岳を目指して歩いていくが、途中雪が深くなりワカンに履き替える。白河内岳手前で急斜面がでてきて雪の量も減ったので、再びアイゼンに戻す。白河内岳山頂では風が少し吹いていることもあり、少ししたらすぐに出発した。昨日からそうだが、天気はすごくいい。赤岳に引き続き雲ひとつない快晴となっている。白河内岳まで歩く最中もすごく気持ちが良かった。

下山は時々シリシェードを交えながらゆっくりと下った。テント場についた後はみんな疲れていたこともあり、到着後しばらくしたらごはんを作り始めた。

3日目、小雨予報であったため、朝の準備に時間がかかると思い少し早く起きる。が、運のいいことにテント撤収の時間はやんでいて。温泉の開館まで時間があったので、ゆっくりと下山していく。しかし下山して温泉の開館時刻が臨時で1時間遅くなっていることに気づく。バスの時間に間に合わないので諦めるが、がっくし。神戸に帰る途中も前の電車で人身事故がおき予定より2時間遅れての帰宅となった。

何はともあれ、天気も良くいい山行となった。



## 2023\_06 氷ノ山体育所ワーク業務報告書

活動内容 : 神戸大学氷ノ山体育所の整備  
活動地 : 兵庫県養父市 氷ノ山 神戸大学氷ノ山体育所 (いわゆる神大ヒュッテ)  
期間 : 2023/06/17 - 2023/06/18  
人数 : 以下 8 名

氏名	学籍番号
三谷昌輝	2107040z
大矢隆太郎	2190579h
後藤潤	2247054z
程研塚	2362169e
美崎丈和	2131512J
新留恭平	2044552t
岩田佑治	2124516t
村上輝幸	2230050L

### 行程

レンタカーにて六甲から大段ヶ平駐車場に移動。そこから氷ノ山ヒュッテへ歩いて移動。  
その後業務開始。

帰りも同様に氷ノ山ヒュッテから大段ヶ平駐車場へ歩いて移動。その後、レンタカーにて大段ヶ平駐車場から六甲へ移動。

レンタカー代、高速料金は別ファイルに記載。

### 報告内容

1. 活動中の事故等の有無 無し

### 業務報告

1. ヒュッテ内清掃
2. ヒュッテ内備品清掃(シュラフを干す等)
3. 薪割り・薪作り
4. 水道整備…水道管が大木で破壊されていたため、一時的に配管を上から通した。

以下、業務中の写真、参加者の写真です。



←図1 ヒュッテ内を掃除する様子

↓←図2 ヒュッテ内備品(シュラフ)を干す様子



図3 薪割り・薪作りの様子





図4 大木により水道管がつぶれているところ、ほって見ている様子。



図5 水道管を切断し、別のホースでつないだ後の写真



図7 現役参加者の写真

※参加者は左から三谷、大矢、美崎、岩田、村上、

## 新人山行 in 剣山

参加者；三谷、長屋、程

行動時間:

[2023/7/15 1日目]

7:35 三宮 BT-10:30 阿波池田駅 BT-11:30-(特急電車)-11:52 貞光駅-12:00-(タクシー)-13:20 見ノ越-14:10 西島キャンプ場

[2023/7/16 2日目]

6:00 西島キャンプ場 - 6:50 剣山山頂- 9:39 標高 1604 - 11:45 標高 1732-13:00 白髪避難小屋にて幕営

[2023/7/17 3日目]

5:00 テント場出発 - 7:10 三嶺-10:15 名頃登山口

新人山行として四国の剣山に二泊三日で行って来ました。後半二日は天気が良く、楽しい稜線歩きとなりました。新入生の二人も楽しんでくれたみたいで良かったです。



## 劔岳 源次郎尾根

2023年8月4日～7日

メンバー CL大矢(3) SL後藤(2) 美崎(3) 岩田(3) 村上(2) 小田(2) 程(1) 長屋(1)

8月4日 アプローチ

前期テスト終了後、各自直接富山へ向かった。計画では小田所有の車で向かう予定だったが、前日に車の故障が判明して、各自サンダーバード、バス、18切符など都合の良い交通手段を使うことにした。富山では、後藤、小田、長屋が駅前で、大矢、程がカラオケで、美崎、岩田、村上が公園で寝た。山行期間に提出の課題を終わらせるため寝不足のメンバーもいた。自分は翌日の朝に課題を提出できた。

8月5日

6:00 富山駅～10:30 室堂～11:15 雷鳥沢野営所～13:00 別山乗越～13:55 劔沢小屋

立山駅に到着すると混雑しており、ケーブルに乗り換えるまでかなり待たされることになった。室堂では大学山岳部が集結しており、中央大など3つのパーティーと遭遇した。中央大には村上の友人もいた。雷鳥沢野営所からの登りでは1年生にはきつかったらしく、遅れていた程の荷物を上級生で分担し、やや軽くして歩いた。別山乗越の途中で軽い雨が降り出したが、適度に体が冷やされて快適であった。劔沢小屋に到着し30分ほど休憩をとった。休憩中、真砂沢方面から来た人と話す機会があり、長次郎谷の雪溪の状態が悪く多くのパーティーが撤退していることを聞かされた。大矢と後藤で話し合い、翌日は八ツ峰から源次郎尾根に変更した。



8月6日

4:00 BC~5:15 源次郎取り付~8:45 I峰~10:00 II峰~12:00 劔岳~15:30BC

3時に起床し、各自朝食を済ませ4時出発。源次郎取り付きで先行2パーティーと遭遇した為、長めに休憩を取った。取り付き直後、先行パーティーはロープを出していた様だが、パスとクライミングシューズを装着し、素早く通り過ぎた。I峰までは、危険箇所もなく予定より早いペースで進んでいた為、休憩時間を多めに取り調節する。II峰の懸垂下降は、1年生の準備が遅くやや時間がかかった。II峰から本峰までは、浮石が多く皆注意して進んでいたが、程が大きめの落石を起こし怒られていた。計画通り12時山頂に到着し、記念撮影をする。去年に比べかなり体力的に余力が残っており、メンバーの成長を実感した。下山時にはガスが出て、日光が遮られ快適であった。探検部出身の岩田さん、美崎さん、村上の下るペースが速く、ついていくのに必死であった。夕食は肉がたくさん使われていておいしかった。

8月7日

5:00 BC ~7:30 別山 ~9:00 富士ノ折岳~10:30 雄岳~12:00 室堂

7日の午後より雨予報が続いていたため、別山、立山経由で予定より早く帰ることにした。別山までは疲れが見られやや遅いペースとなった。別山からは富山湾までよく見えていた。別山から立山までは快適な稜線で、良い朝の運動になった。立山では大学生（山岳サークル？）が男女で楽しそうに話しており、羨ましく思いながら見ていた。室堂に着くと、みくりが池温泉に入るものと入らないものに分かれそれぞれの帰路について。



## 大台ヶ原 堂倉谷奥ノ右俣 沢登報告書

期間：2023年9月3日～9月4日

メンバー：城間 (CL・B4)、後藤(SL・B2)、侯 (OB)

天候：晴れ

9月3日 (土)

22時にJR塚本駅へ集合し城間の運転で大台ヶ原駐車場へと向かった。25時ぐらいに到着したが駐車場はガラガラであった。女性が大声で電話しており、あまり眠れない車中泊だった。



9月4日 (日)

06:45 大台ヶ原駐車場 ～

08:00 ミネコシ谷入溪 ～ 10:50 堂倉谷に合流 ～ 12:10 40m 滝直下 ～ 16:00 日出ヶ岳 ～ 16:30 大台ヶ原駐車場

太陽が半分ほど顔を出した頃、眠い目をこすりながら駐車場を出発する。軽自動車に3人で車中泊をするのはやや狭かったのかもしれない。初めは普通の登山道なので、大台ヶ原らしい開発が進んだ道を悠々と歩いていく。日出ヶ岳より先は直近の台風による倒木が多らしく通行不可能と書いてあったが、その程度のことには構ってられないので予定通り進むことにした。10分ほど歩き、1525 peak 手前のコルから入溪、ミネコシ谷下降を開始する。しばらくすると流木が大量に重なっているところに出てきたので、大きな岩の上を越えるようにして左岸を巻いた。18m 滝を左岸の木を利用して懸垂下降、続く2段20mは右岸の木を利用して懸垂下降した。使用ロープは50mロープ1本、つまり25m懸垂を2回行った。本流に合流するまで10m前後の滝下降はまだ続いたが、懸垂することなく巻いて降りることが出来た。本流に至るまでは登山道を外れてから3時間程度だったので非常に順調に進んでいる。本流合流後、堰堤を越えてすぐに奥ノ右俣へと入った。ミネコシ谷では見えなかった魚影がチラホラと現れて一同かなり喚起していた。本流の滝は出来る限り直登した。後藤(2回)より侯OBの方がスイスイと登っていたが、体力面では後藤に余裕がありそうだった。40m滝直下では左手に延びる小ルンゼを60mぐらい登り、少しトラバースをしてから5mぐらい岩を直上した。ここではロープを1ピッチだけ出した。懸垂することもなく沢へと戻ることが出来、高巻きがかなり上手いこといったのではないだろうか。水が全く沢臭くなく透明度も高い綺麗な沢であった。比良の奥ノ深谷が中級で今回の堂倉谷奥ノ右俣が初級らしいが、妥当だと感じた。

## 北岳報告書

文責：城間（農・B4）

2023/12/27（水）～2023/12/30（土）

天候：晴れ、雪が少ない

参加者：城間（CL・B4）、後藤（SL・B2）、美崎（食料・B3）



12/27(水)Day1

17:50 夜叉神ゲート登山口 ～ 19:03 鷲住山展望台

17時50分、夜叉神ゲートへは葦崎から芦安観光タクシーで移動（3人7,800円）。夜叉神トンネルまではdocomoのみ電波が通じていた。トンネル天井には氷柱が多数あり、非常に恐ろしく感じた。1時間ほど歩き、鷲住山展望台の駐車場で泊。少しだけ動物の気配がした。

12/28（木）Day2

5:30 鷲住山展望台～ 5:53 鷲ノ住山～ 7:26 歩き沢橋 ～ 10:37 池山御池小屋 ～12:28 城峰 ～ 14:03 TS (2,590 m)

5時半出発、まだまだ暗い。鷲ノ住山のくだりがまあまあ長く、吊橋から林道に上がる岩場が少しいやらしかった。

歩き沢橋から池山御池小屋までは3時間の急登である。登れど登れど雪が出ず、ついには小屋付近にもわずかな霜柱が見られたのみであった。docomoとauの電波が入っていた。

小屋から 200 m ほど標高をあげたところで雪がまばらに出始め、本格的に出てきたのは城峰 (2,372 m) 以降であった。この日は砂払 (2,730 m) まで標高を上げる予定であったが、後藤は足がつり、城間は体力が限界であったので 2,590 m 辺りの緩傾斜でテントを張った。探検部兼任の美崎はまだ体力に余裕があり、少し先を見てきたいらしく、底なしの体力にプロパー山岳部員 2 名は腰を抜かした。晩飯はバターで作ったペミカレー、あまりの美味さに舌鼓をうつ。3 人全員一気にかき込み、胃腸の悲鳴が響き渡っていた。カラマツに守られ一晩を過ごす。動物の気配は薄い。

### 12/29(木)Day3

6:47 TS (2,590m) ~ 7:38 ボーコン沢の頭 ~ 8:42 八本歯の科尔 ~ 9:33 吊尾根分岐 ~ 10:00 北岳 ~ 11:03 八本歯の科尔 ~ 14:23 池山御池小屋 ~ 16:27 歩き沢橋

前日に北岳へ登頂した人によると、八本歯は岩が出ており懸垂下降をする必要はなく、するとしても FIX 工作で十分と教えていただいた。むしろ、山頂直下のトラバースの方が怖かったとのこと。念のため、FIX ができる準備だけ整えてテン場を後にした。ガイドブック通り、砂払は風を防げる幕営適地が複数あった。ボーコン沢の頭まで出ると念願の北岳が間近で見え、バットレスのあまりの迫りに圧倒された。八本歯の岩場で一箇所、3 m ほど急な岩場があったが、クライムダウンで問題なく降りた。堡壘岩中央陵下降路の方がよっぽど怖い。吊尾根分岐からすぐの 3130 m ぐらいで急斜面を 30 m ほどトラバースしたトレースがあった。これが山頂直下のトラバースか。下から見ると、トラバースよりかは右手の岩場を伝っていったほうが、滑落の危険なく安全に通行できるのではないかのように見えた。しかし、モノは試しにトラバース道のトレースを辿った。すると、アイゼンの刺さりには良かったが、少し雪が緩んでおり落ちたら谷底まで止まらずに落ちる危険性がある。帰りは使わずに岩稜体から降りることにした。10 時、北岳登頂。千丈ヶ岳に甲斐駒ヶ岳はもちろんのこと、北アルプスまで見渡せるほど空気が澄んでいた。私にとっては 3 年前からずっと憧れていた冬の北岳であり、膝から崩れ落ちそうなほどの喜びがあった。山頂から見る間ノ岳が特に際立って美しい。北岳から見る間ノ岳、間ノ岳から見る北岳は互いに素晴らしい眺望をしていた。名残惜しいが 10 時 20 分に下山を開始。北岳から歩き沢まで下山する道では、計 8 組ほどの登山者があった。年末の北岳の人気に驚愕した。途中、池山御池小屋前の凍りついた池でスケートをして遊んだ。後藤がなぜかピッケルで池を壊そうとしていた。歩き沢橋では、通行の邪魔にならないよう、落ち葉が寄せられている待避所でテントを張った。今晚の夜はペミシチュー (ペミカンシチュー)。餅を交えて一足早いお雑煮をいただいた。



12/30(土)Day4

6:21 歩き沢橋～ 8:05 鷲ノ住山 ～9:21 夜叉神ゲート登山口

夜叉神の長いトンネルを抜けると、そこは人間界であった。鳥はさえずり、蝶はふわりふわりと飛んでいる。芦安観光タクシーにて喜久乃湯温泉へ (9,600 円)。

とにかく雪が少なかったが経験になったので良し。次は厳冬期。



以上

## 第六章 事務局報告（総会・理事会・会計・予算）

### 2023年度 神戸大学山岳会定例総会 議事録

事務局

2023.4.22 14:00～16:00 神戸ラッセホール（パンジー）（文中敬称略）

出席者（名誉会員）山形裕士、井上達男、居谷千春、（特別会員）小池淳司、（正会員）東郷賢治、土山尚彦、金隼泳、（理事）山田健、大竹口誠治、長谷川浩、岩井正隆、山本恵昭、野邊久美、（監事）金井良碩、（現役）大矢隆太郎、三谷昌輝、美崎丈和、後藤潤、小田悠真、村上輝幸、程 研塚（Web参加）中川勝八郎、山本裕宣、松村健司、井部良太  
計 32 名：出席 14 名、Web4 名、準会員 7 名、委任状提出 25 名（開催案内 132 名）  
出席 14+Web4+委任 25=計 43 名で総会成立。

- 1 会長あいさつ 山田会長
- 2 議事（議長：事務局長）：各議案とも満場一致で承認
  - (1) 2022 年度活動報告（第 1 号議案） 事務局長
    - ① ACKU-News46 号の発行（2023.3）
    - ② 2022 年度定時総会開催(対面・Web 併用開催)（2022.4.28）
    - ③ 氷ノ山ヒュッテ竣功 60 周年祝賀会（2022.11.5-6）
    - ④ 例会山行(第 244 回、第 247 回)
    - ⑤ 理事会（第 101、102、103 回）
  - (2) 2022 年度決算報告（第 2 号議案） 会計担当理事・監事
  - (3) 役員異動（第 3 号議案）理事会案  
理事辞任：山本恵昭、事務局員就任：侯慧開
  - (4) 2023 年度活動計画（第 4 号議案） 各担当理事  
・ 例会山行  
・ ACKU ニュース（No 47）の発行  
・ 海外登山研究会（適宜開催）
  - (5) 2023 年度予算案（第 5 号議案） 会計担当理事
- 3 連絡・報告事項
  - (1) 物故会員（三輪進一）、退会会員（小林廣夫、中園卓爾）
  - (2) 現役紹介・現役活動報告
  - (3) 会員近況報告
- 4 閉会

以上

2023 年度 神戸大学山岳会定時総会__出欠回答記載の「近況報告」 2023.4.22			
会員番号	氏名 (敬称略)	出欠	連絡事項、近況報告
258	東郷賢治	出席	昨秋 左足（腰から足首）に帯状疱疹発症。以降 3 ヶ月半左足力は いらず、を今年依頼 2 万歩/日のトレーニングに励んでいます。
261	豊田寿夫	欠席	元気にやっています。
267	三輪進一	欠席	ご家族より連絡（ハガキ）。三輪進一様は 2022 年 8 月ご逝去された との事でした。「父は生前お送り頂いた「山と人」を毎回楽しみにし ていました。今までありがとうございます。」との事です。

277	柏田紘一	欠席	総会の時は神戸にいません。欠席です。ACKU News46号何度も読み返しています。高田和三さんにはネパール・ブータンの旅では妹がお世話になりました。
282	田中信行	欠席	今冬はスキーツアー3回を楽しむことが出来ました。①1/9-13 苗場スキー、②2/10-15 ハチ高原スキー、③2/26-3/2 志賀高原スキー
285	壺阪祐三	欠席	3/12に八丈富士(854m)に遠征、登頂しました。1/週の里山が少しづつなくなって来ました。でも元気です。
295	原田 聡	欠席	高齢のため、欠席します。
312	鶴谷将俊	欠席	登山とはすっかりご無沙汰状態です。
317	中園卓爾	欠席	退会届：80歳到達を機に本日をもって山岳会を退会させていただきます。永年お世話になりました。皆様のご健闘を祈念いたします。 2023.4.7
319	白形 洋	欠席	回答が遅くなり申し訳ありません。足の調子が今ひとつなので、残念ながら欠席とします。
333	居谷千春	出席	QRコードからの回答サイト設定など、さすがです。
337	森長 敬	欠席	所用あり出席できず申し訳ありません。役員の方々には、会運営のためにご尽力いただきありがとうございます。ご盛会をお祈りします。
341	中川勝八郎	リモート	リモートは参加出来ない場合もあります。
342	坂本 淳	欠席	総会には出席できず申し訳ありませんでした。今年も無理のない範囲で近場の山、百名山に登りたいと思っています。
346	松村政則	出席	今年2月末で、長年勤めた会社を定年退職致しました。これからは、出来るだけ登山もやっていきたいと思っております。
348	小林 功	欠席	ご無沙汰しております。4/22のその時間は所用が重なるため、欠席致します。今年北アルプスにも登ってみたいと思っております。皆さまのご健勝をお祈りします。
356	片山博仁	欠席	住所が変わりました 西宮市 (以下省略)
361	中堀正樹	欠席	住所変更 (熊本市 以下略)
363	川端 充	欠席	残念ですが欠席します。東京単身赴任が続いています。
369	野邊正彦	欠席	いつもお世話になっております。すみません、営農組合で苗代作り等のため、欠席させていただきます。
389	小宮勇介	欠席	yusuqea@gmail.com に変更をお願いします。 昨夏に伊吹山に登りました。熊野古道の新宮～海沿いを歩きました。
413	山本浩輔	欠席	転職しました。4月11日以降、郵便物は以下にお願いします(板橋区 以下略)。
421	金 隼泳	出席	先月末、現役の大澤さんと鹿島槍東尾根を登ってきました。ところで今月は、久々に韓国ソウルに来て日帰り登山をしましたが、とても気軽に登れるので皆さんも韓国で山登りしてみませんか。今後の更なる海外登山の弾みになるかもしれません。
901	大仲 秀治	欠席	都合により欠席します。申し訳ありません。
特別	桜井勝之	欠席	いつも連絡をありがとうございます。皆様の健康と会の発展を祈念いたします。
特別	朝日教之	欠席	ご連絡頂きありがとうございます。今後ともよろしく申し上げます。
特別	沖村 孝	欠席	ありがとうございます。ご苦勞様です。お元気ですか？
特別	石川 毅	欠席	今回色々都合が悪くなり申し訳ありません。今回私事ですが原田の森ギャラリーに建築写真家協会の展覧会に出展して居ます ご都合が良ければ見て頂きたいのですが。

名誉	井上達男	出席	リモート参加の可能性あり
名誉	乙藤洋一郎	欠席	乙藤は元気になっています。岡山で地質案内で小学生・中学生を引き連れて歩いています。

## 神戸大学山岳会第 102 回理事会 議事録

2023 年 2 月 12 日 (日) 18:00~19:00 Web/Zoom 会議 (文中敬称略)

1. 参加者：理事 山田、岩井、大竹口、山本恵、長谷川、野邊久、藤川  
監事 金井良、森長
2. 議 題：2023 年度総会開催準備、ACKU ニュース発行・発送、新年度計画等
3. 総 会：4 月 22 日(土) 開催 14-17 時 (3 時間)  
(対面&リモート\_ハイブリッド開催 (Zoom 利用))  
会場：ラッセホール (仮予約済) (大阪凌霜は空無し)、会費徴収 5 千円  
議事：決議・報告事項 (議案作成)
  - 1 活動報告・計画 (山田)
  - 2 事務局報告 (長谷川)
  - 3 会計報告 (岩井) 2022 年
  - 4 例会山行 (山本) 2022 年報告  
2023 年計画：7 月下旬雷鳥沢 (大竹口)、各幹事と確認後計画作成へ
  - 5 予算 (岩井) 2023 年
  - 6 理事の変更：山本退任 (総会承認事項)
4. 懇親会：総会議事承認後 (2 時間程度)
  - ・講演：「千本杉ヒュッテ 60 年の歴史」紹介 (山田)
  - ・現役活動報告、参加者挨拶：河端先生、小池先生、参加者  
(河端先生退官後、4 月以降の山岳部長については別途確認 (山田))
5. 理事会運営：例会担当の後任は藤川 (現役担当と兼務)  
現役担当補佐として、侯君に協力依頼へ (他候補に金君、井部君も)
6. 今後の日程
  - ・3/11 発送印刷物作成/理事会メンバー確認 (メールベース)  
(案内文、議事案内、例会山行計画、)
  - ・3/18 拡大理事会 (対面) (News 発送作業含む、14:00-16:00)  
場所：神戸大学内会議室他 (長谷川、現役)  
議事：総会準備 (活動計画、会計報告・予算、)  
発送：1. 開催案内、2. 事務局連絡 (会費)、3. 例会山行計画、4. 滞納会費情報、  
5. ACKU-News、6 返信ハガキ、7. 封筒、8. 宛名ラベル
  - ・4/14 会計監査 (捺印完了)
  - ・4/15 総会出席回答締め切り 4/16 総会資料送付 (All-Mail)
7. ACKU-New 発行
  - ・最終入稿 3/10、納品 3/17?、発送作業 3/18 (拡大理事会前 1h)
  - ・準備：封筒、宛先ラベル、発行案内 (会員向け、外部向け)
  - ・発送：退会会員にもお礼の意味で最終発送 (大谷、内藤)  
要外部向けリスト (記事関連、故人関係・平井先生関係) (大竹口・長谷川)

## 8. その他

- ・河端先生 退官・謝恩会の企画・準備（開催は5-6月を想定）  
担当：藤川（長谷川）、金君や城間君とも相談し、幹事選定、準備へ

以上

## 神戸大学山岳会第103回拡大理事会 議事録

事務局

1. 日時 2023年3月18日（土） 14:00～（文中敬称略）
2. 場所 神戸大学 学生会館 第3集会室
3. 参加者 理事\_山田、岩井、大竹口、山本恵、長谷川、野邊久、現役 大矢他
4. 議 題
  - 1 2023年度総会内容
    - ・開催：4月22日（土）15:00-16:30（対面&リモート\_\_ハイブリッド開催（Zoom利用））
    - ・会場：ラッセホール パンジー（B1）（神戸・元町）
    - ・議事：決議・報告事項（議案作成）
      - 1 活動報告・計画（山田）
      - 2 事務局報告（長谷川）
      - 3 会計報告（岩井）
      - 4 例会山行（山本）
      - 5 予算編成（岩井）
    - ・講演：「千本杉ヒュッテ60年の歴史」紹介（山田）
  - 2 総会準備資料：活動計画、会計報告・予算、  
4/14 会計監査、捺印完了  
4/15 総会出席回答締め切り 4/16 総会資料送付（All-Mail）  
発送物：1.開催案内、2.事務局連絡（会費）、3.例会山行計画、4.滞納会費情報、  
5.ACKU-News、6返信ハガキ、7.封筒、8.宛名ラベル
  - 3 河端先生 退官・謝恩会の開催について  
5～6月を想定、現役活動でお世話になった世代で企画。藤川と事務局長で対応。

以上

## 神戸大学山岳会 第104回理事会 議事録

事務局

2023年10月22日（日） 18:00～リモート会議（文中敬称略）

1. 参加者：理事 山田・岩井・大竹口・長谷川・野邊、監事 金井良、事務局 俣
2. 議事
  - 1 河端先生の部長ご退任謝恩会の件（理事在任中は見合わせの方向）  
山田会長より電話で河端先生に連絡。引き続いて多忙のため、理事在任中は時間調整が難しい。理事退任のタイミングで実施とする事でご了解していただいた。
  - 2 水谷先生の副部長ご就任挨拶の件  
10月22日、山田、長谷川、小田（現役）で研究室@深江を訪問。山岳会として、ご

挨拶と就任のお礼を伝え、山岳会にも名誉会員として入会いただく旨了解を得た。

3 ACKU ニュース発行の件

大竹口担当より編集案提示。会の会計ひっ迫の中、発行見合わせの案も出たが、年間計画として総会承認を受けている事業であるので、予定通り発行となった。例年通り、3月に発行、総会案内とともに郵送を予定。

4 会費納入・会計の状況

会費納入状況が厳しく、一般会計が底をつく可能性がある（会計担当 岩井）。例年、3月に会報発送同封により過去の納入状況通知と新年度会費納入を案内しているが、期中の案内や催促も必要。通信費節約のために、All-Mailでも発信も検討する。

5 氷ノ山ヒュッテ補修対応の件

デッキの劣化破損等があり補修が必要との事（山田）。次回点検時に状況を確認の上、大学への説明、補修費の相談、業者による現地確認と見積入手、などを進める。

6 その他（連絡事項等）

・緊急連絡網の整備

現状、現役の山行計画のチェック・アドバイス体制が不明確となっているので、相談対応中の若手OB名簿を整備し、山岳会からの正式な対応依頼状を発行するなどの対応が必要。長谷川が現役に確認の上、対応する。

・役員改選の準備

来春の役員改選にあたり、今後、新体制の協議を進め、総会向けの案を理事会で決定することとする。

・総会準備

例年どおり4月中下旬（4月20日又は27日の土曜日が候補）開催に向け、山岳部長、副部長の日程を確認する。ACKU-Newの発行（納品）と案内状の発送準備を3月上旬に行うべく準備を進める。

以上

# 2022年度会計決算報告

事務局長 長谷川浩 理事(会計) 岩井正隆

(2022.4.1~2023.3.31)

## 1. 一般会計

### <収入の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
前年度繰越金	425,829	425,829	0
会費収入	450,000	230,981	-219,019
協力金収入	0	30,000	30,000
雑収入(預金利息)	100	40,098	39,998
計	875,929	726,908	-149,021

雑収入: 利息4円, 平井先生偲ぶ会・総会残金寄付35,094円, 山と人(販売)5,000円

### <支出の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
事務・通信・振込手数料	70,000	15,000	-55,000
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	200,000	144,310	-55,690
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	0	-5,000
雑費	50,000	21,970	-28,030
次年度繰越金	270,929	265,628	-5,301
計	875,929	726,908	-149,021

## 2. 特別事業基金

(単位:円)

費目	22年3月現在残高	23年3月現在残高	増減
「山と人」積立金	344,684	388,086	43,402
海外登山準備積立金	200,000	300,000	100,000
千本杉ヒュッテ維持管理金	90,625	55,509	-35,116
総計	635,309	743,595	108,286

「山と人」収入: 積立金 100,000円、利息 3円、封筒返金 9,509円 支出: 発送費6,600円

海外登山準備積立金 100,000円、

千本杉ヒュッテ維持管理金

収入: ヒュッテ使用協力金 98,000円、管理業務謝金 35,000円、寄付(林市雄)20,000円

支出: 備品購入 79,620円、発電機購入 53,291円、整備作業食料費 55,205円

## 3. 遭難対策基金

(単位:円)

費目	22年3月時点残高	23年3月現在残高	増減
遭難対策基金	2,517,137	2,517,159	22

利息22円

## 4. ヘリテージ基金

(単位:円)

費目	22年3月現在残高	23年3月現在残高	増減
ヘリテージ基金	2,650,047	2,650,071	24

利息 24円

※一般会計: 「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」東加古川支店 口座番号 4332\*\*\*

※「山と人」積立金、海外登山準備積立金: 「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3407\*\*\*

※千本杉ヒュッテ維持管理金: 「三菱東京UFJ銀行」普通預金にて管理

「三菱東京UFJ銀行」東神戸支店岡本出張所 口座番号 4672\*\*\*

※遭難対策基金: 「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3815\*\*\*

※ヘリテージ基金: 「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」神戸営業部(店番号500)口座番号 1699\*\*\*

## 【監査報告】

以上、監査の結果 適正且つ妥当であることを認めます。

2023年 4月7日

監事

金井 良碩

監事

森長 敬



神戸大学山岳会

2023年度予算

(2023.4.1～2024.3.31)

1. 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	22年度予算額	23年度予算案	増減
前年度繰越金	425,829	265,628	-160,201
会費収入	450,000	450,000	0
雑収入	100	100	0
計	875,929	715,728	-160,201

<支出の部>

(単位:円)

費目	22年度予算額	23年度予算案	増減
事務・通信・振込手数料	70,000	70,000	0
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	200,000	200,000	0
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	5,000	0
雑費	50,000	50,000	0
予備費(次年度繰越金)	270,929	110,728	-160,201
計	875,929	715,728	-160,201

2. 特別事業基金

<「山と人」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	388,086		388,086
当該年度積立金	100,000		488,086

<「海外登山準備金」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	300,000		300,000
当該年度積立金	100,000		400,000

<千本杉ヒュッテ維持管理金>

(単位:円)

	収入	支出	計
前年度繰越金	55,509		
ヒュッテ使用料	35,000		
管理業務謝金	35,000		125,509
食料費等補助金		10,000	
備品購入費		60,000	
予備費		90,625	125,509



## < 編集後記 >

ACKU news47号は、2年連続の発行となりました。2020年4月から、会長・副会長・事務局長等の交代など新体制になり、理事が一部交代しましたが、もうすぐ4年になります。会誌担当も、8年目になりましたが、編集内容等につき、忌憚のないご意見を頂きたい。

2023年度の山岳会のイベントとしては、特になく、2023年度に実施された会員の海外及び国内での個人活動記録及び新型コロナ明けで復活した山岳会の例会山行(数が少ないですが)掲載しております。個人山行をされた方々から沢山の紀行文を投稿して頂きました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。

ACKU ニュースは、経費削減のため、すべてモノクロ印刷となっていますが、ACKU のホームページにアクセスして頂ければカラーの写真もご覧になれるようにしております。

今後も、例会山行記録の掲載だけでなく、新執行部の活動方針である①海外登山への機運を醸成②他団体との交流を促進③山岳部活動への支援拡大④ヒュッテの活用促進⑤財政基盤の強化に沿った記事を掲載して行きたいと思います。

また、若手・中堅・熟年各OBからの積極的な寄稿をお願い致します。特に、今後は、若手OBの投稿に期待したいと思います。

個人的には、新型コロナ明けで本格的な山登りを再開し、2023年5月は屋久島の宮之浦岳、9月は日高山脈の幌尻岳と女房と参加したしまなみ海道75KMウォークと四国の剣山登山、10月は荒川三山と赤石岳等に登って来ました。赤石岳と一緒に登った方が、百名山を達成されたこともあり、私も70歳までには百名山を達成すべく、残り30山を3年以内で達成すべく今年からの山行計画を立てて行きたいと思います。

退職後、体力維持のためジョギングをしており、2024年2月のさいたまマラソンにも5年振りに参加しましたが、山で痛めた右膝の調子が良くなく、タイムは制限時間を30分切る程度で、年を追う毎にタイムが悪くなるので、この辺りが潮時かなと思っています。チベット語の週1回の授業は継続しておりますが、会話の機会がないので、最近では、チベット文学の本を集中して読むようにしております。

新型コロナは、ほぼ、終息しましたので、今年度は、昨年同様、右膝の状態に配慮しつつ、積極的に山登りに取り組んで行きたいと考えております。

2024/2/28 大竹口誠治 記



昨年スイス、ベルナーオーバーラントのグリンデルワルトを訪れた。3度目であるが、いつ来ても周囲の山々には圧倒される。特にヴェッターホルンは村の背後に特異な姿でそそり立っている。この北壁には1945年8月（日本敗戦の時）に高木正孝先生が田口二郎氏と共に登攀されている。今回はグローセシャイデック（画の左の鞍部）まで行って間近にこの覆いかぶさるような壁を見上げたが、どこをどう登るのか全く見当がつかないのである。

ACKU-news 47 発行日 : 2024年3月16日

発行 : 神戸大学山岳会・山岳部

発行人 : 大竹口誠治

編集長 : 大竹口誠治 編集委員 : 小林功、近藤昂一郎

原稿送付先 大竹口誠治 〒338-0011 埼玉県さいたま市中央区新中里 1-9-14

E-MAIL: 6824vgdn@jcom.zaq.ne.jp

小林 功 〒197-0823 東京都あきる野市野辺 508-11

E-MAIL: charin8458@gmail.com

近藤昂一郎 351-0104 埼玉県和光市南 1-22-8-2

E-MAIL: k.kondo331@gmail.com

本誌 ACKU-news は神戸大学山岳会山岳部の内部的機関紙として発行しています